

発掘調査報告書第33号

平成5年度試掘調査

上の原Ⅲ遺跡・雨堀遺跡・小鍛冶古墳群

1994. 3

駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告書第33号

平成5年度試掘調査

上の原Ⅲ遺跡・雨堀遺跡・小鍛冶古墳群

1994. 3

駒ヶ根市教育委員会

序 文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、平成5年度に実施しました上の原Ⅲ遺跡・雨堀遺跡・小銀治古墳群の試掘調査の報告書であります。

この3遺跡は、天竜川の第1河岸段丘上に位置し、かつて御子柴型尖頭器の出土したことからるとともに、現存する古墳としては市内ではここだけとなった小銀治古墳群のあるところであります。

今回の調査は、この一帯が工業団地として開発される計画があり、その事前の試掘調査であります。

上の原Ⅲ遺跡では、新たに旧石器の存在を確認することは出来ませんでしたが、かつて下村修氏が発見した地点を一部残して後世に伝えることとなりました。小銀治古墳群につきましては、昨年度の調査と併せ、あらたに2基の古墳の存在を確認する事が出来ました。大正年間の鳥居龍藏博士の調査のおり、10基の古墳の存在が知られていたところですが、これによって現存する4基を含め9基の古墳が確認されたこととなります。

小銀治の古墳群は、先述したとおり市内で唯一残る古墳として貴重なものであり、開発によって破壊されることのないよう開発側との協議を進めてまいりました。その結果、完全な形で残されている3基（市有形文化財）のうち、2基については用地外とし、残る1基についても史跡公園として保存することとなりました。わずかに形をとどめる1基についても、残されることとなり大変嬉しく思う次第であります。

このたびの調査が、県教育委員会文化課のご指導をはじめ、地権者の皆様、災天下から雪の降りしきる中まで長期にわたり調査に従事いただいた調査団の皆さん、快く作業に参加して下さった地元の皆さん等、多くの方々のご協力によって、無事初期の目的を果たすことができましたことに心から感謝申し上げますとともに、この報告書が地域史研究の一助なればと念願する次第であります。

平成6年3月20日

駒ヶ根市教育長 高 坂 保

例　　言

1. この報告書は、上の原工業団地計画に伴う事前の試掘調査であり、平成5年度の文化庁補助事業を受けて実施したものである。
2. 本報告書は、年度内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。
3. 図の層位・縮尺などは、各図に示してある。
4. 土器の実測・製図は北澤武志が、遺構の製図及び石器の実測・製図は氣賀澤進が、遺物の復元は木下平八郎があたった。
5. 写真撮影及び編集については、木下平八郎があたった。
6. 本報告書の編集は氣賀澤があたった。執筆は氣賀澤・木下があたり各項目ごと文末に記してある。
7. 遺物及び実測図並びに調査に伴う関係資料は、駒ヶ根市立博物館に保管してある。

目 次

序 文

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 試掘調査に至る経過.....	1
第2節 調査体制.....	2
第3節 試掘調査日誌.....	3

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的位置及び地形・地質.....	9
第2節 歴史的環境.....	9

第Ⅲ章 試掘調査

第1節 調査概要.....	15
第2節 上の原Ⅲ遺跡.....	15
1. 調査方法と概要.....	15
2. 造構と遺物.....	20
第3節 雨堀遺跡.....	24
1. 調査方法と概要.....	24
第4節 小銀治古墳群.....	26
1. 小銀治古墳群について.....	26
2. 調査方法と調査概要.....	27
3. 第2号古墳.....	34
4. 第7号古墳.....	34
5. 第1号土壙.....	41
6. 石室状造構.....	42
7. 第1号溝状造構.....	51
8. 第2号溝状造構.....	52
9. 第1号古墳.....	57
第5節 まとめ.....	58

挿図目次

第1図	上の原Ⅲ・雨堀・小銀治古墳群位置図	8
第2図	上の原Ⅲ・雨堀・小銀治古墳群地形図及び周辺の遺跡	10
第3図	上の原Ⅲ・雨堀・小銀治古墳群発掘調査概要図(折り込み)	13
第4図	上の原Ⅲ遺跡発掘概要図	16
第5図	上の原Ⅲ遺跡1号トレンチ地層断面図	17
第6図	上の原Ⅲ遺跡4号トレンチ地層断面図	18
第7図	上の原Ⅲ遺跡第2号土壤実測図	20
第8図	上の原Ⅲ遺跡2号土壤出土遺物	21
第9図	上の原Ⅲ遺跡トレンチ出土遺物	22
第10図	雨堀遺跡発掘概要図	24
第11図	雨堀遺跡出土石器	25
第12図	鳥居龍藏博士調査時の古墳位置図	26
第13図	小銀治古墳群発掘調査概要図No.1	28
第14図	小銀治古墳群発掘調査概要図No.2	29
第15図	小銀治古墳群発掘調査概要図No.3	30
第16図	小銀治古墳群発掘調査概要図No.4	31
第17図	小銀治古墳群発掘調査概要図No.5	32
第18図	小銀治古墳群発掘調査概要図No.6	33
第19図	小銀治古墳群第2号古墳実測図	33
第20図	小銀治古墳群第2号古墳G17トレンチ実測図	34
第21図	小銀治古墳群第7号古墳実測図(折り込み)	35
第22図	小銀治古墳群第7号古墳1号・2号トレンチ実測図	37
第23図	小銀治古墳群第7号古墳3号トレンチ実測図	38
第24図	小銀治古墳群第7号古墳6号・7号トレンチ実測図	39
第25図	小銀治古墳群第7号古墳8号トレンチ実測図	40
第26図	小銀治古墳群第7号古墳出土土器	40
第27図	小銀治古墳群第7号古墳出土鐵器	40
第28図	小銀治古墳群第1号土壤実測図	41
第29図	小銀治古墳群1号トレンチ西壁断面図	42
第30図	小銀治古墳群G20西壁断面図	42
第31図	小銀治古墳群石室状造構実測図	43

第32図 小銀治古墳群石室状造構遺物出土状況	44
第33図 小銀治古墳群石室状造構出土遺物	45
第34図 小銀治古墳群第1号溝状造構南側部分実測図(折り込み)	47
第35図 小銀治古墳群第1号溝状造構北側部分実測図(折り込み)	49
第36図 小銀治古墳群第1号溝状造構出土石器	51
第37図 小銀治古墳群第2号溝状造構実測図(折り込み)	53
第38図 小銀治古墳群第2号溝状造構出土石器	54
第39図 小銀治古墳群第1号古墳実測図	56

図版目次

- 図版 1 上の原Ⅲ遺跡全景
- 図版 2 上の原Ⅲ遺跡トレンチ調査状況
- 図版 3 上の原Ⅲ遺跡トレンチ調査状況
- 図版 4 上の原Ⅲ遺跡 2号土壤
- 図版 5 上の原Ⅲ遺跡・小銀治古墳群調査状況
- 図版 6 上の原Ⅲ遺跡トレンチ調査状況
- 図版 7 上の原Ⅲ遺跡・小銀治古墳群調査状況
- 図版 8 小銀治古墳群雨洞地区遠景
- 図版 9 小銀治古墳群トレンチ・グリッド調査状況
- 図版 10 小銀治古墳群 2号古墳周溝・トレンチ調査状況
- 図版 11 小銀治古墳群 7号古墳遠景・出土鉄剣
- 図版 12 小銀治古墳群トレンチ状況・1号土壤
- 図版 13 小銀治古墳群トレンチ状況
- 図版 14 小銀治古墳群石室状造構
- 図版 15 小銀治古墳群石室状造構出土遺物
- 図版 16 上の原Ⅲ遺跡・小銀治古墳群雨洞北地区出土遺物
- 図版 17 小銀治古墳群1号・2号古墳

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 試掘調査に至る経過

上の原Ⅲ遺跡・雨堀遺跡・小銀治古墳群のある下平上の原一帯を工業団地として、開発しようとする計画が持ち上がりました。

上の原Ⅲ遺跡は故下村修氏が「御子柴尖頭器」を発見した所として知られており、しかも市内では唯一の先土器時代の遺跡であります。さらに小銀治古墳群はこれまた市内に残る唯一の古墳であり、現在4基が残されていますが大正年間の島居龍藏博士の調査の折には、ここに10基の古墳があったと記されています。※1

このように重要な遺跡であるため、極力保存することを前提としてそのための試掘調査を行うこととしました。平成4年度・5年度の2箇年にわたって実施することとなり、平成5年度については、各方面のご理解をいただき文化庁の補助事業として実施することとなりました。

補助事業はヒヤリングの結果、平成5年度に総事業費6,196,000円で、上の原Ⅲ遺跡の先土器の分布状況の調査、残される古墳の範囲確認のための周溝の調査、消滅した古墳の確認調査、さらに用地の外にある古墳の位置関係や平面図を作ること、さらに用地外に主体があると思われる雨堀遺跡の範囲確認調査を行い、つづいて平成6年度で報告書の刊行を行う事業行計画を策定した。

調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととなり、小銀治古墳群試掘調査団を組織し、団長には友野良一氏をお願いして平成6年6月11日より現場の調査に入った。

その後、予想より遺物包含層までが浅くまた遺構の発見も少なかったため、県教育委員会と協議を重ねた結果総事業費を4,200,000円に減額し、本年度で報告書も刊行するとの計画変更を行うこととなった。

保存措置については、別項にて触れることとする。

事務手続きは以下の通りである。

平成5年5月1日 埋蔵文化財発掘調査の通知

5月10日 文化財関係国庫補助事業の内定通知（平成5年4月26日付府保伝第7号内定）

5月20日 国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

文化財保護事業補助金（県費）の内示通知

5月31日 文化財保護事業補助金申請書（県費）提出

市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との委託契約締結

6月5日 機材運搬など発掘調査準備

- 6月11日 発掘調査開始
- 9月27日 文化財関係国庫補助事業の交付決定通知（平成5年8月11日付け委保第71号）
文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知
- 12月7日 計画変更承認申請書（国庫）提出
文化財保護事業計画変更承認申請書（県費）提出
- 月 日 文化財関係国庫補助事業の変更交付決定
- 3月15日 文化財保護事業補助金（県費）の変更交付決定

*1 烏居龍蔵「先史及原始時代の上伊那」信濃教育会上伊那部会 大正15年

第2節 調査体制

◎駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会

- 顧問 林 朝昭（駒ヶ根市教育委員長）
- 会長 高坂 保（駒ヶ根市教育長）
- 理事 川端 清司（駒ヶ根市教育委員会生涯学習課長）
 " 友野 良一（駒ヶ根市文化財審議会会长）
 " 松村 義也（" 副会長）
 " 竹村 進（" 委員）
 " 林 越（" " ）
 " 吉江 修深（" " ）
 " 新井 徳博（" " ）
 " 気賀澤 進（駒ヶ根市立博物館長）
- 監事 宮脇 昌三（駒ヶ根郷土研究会会长）
 " 下平 基雄（駒ヶ根市役所）
- 幹事 市村 重実（駒ヶ根市教育委員会生涯学習課長補佐兼生涯学習係長）
 " 中村 敏郎（" 生涯学習係）
 " 北原 純（" " ）
 " 北澤 武志（駒ヶ根市立博物館）
 " 白澤 由美（" 嘱託）

●小銀治古墳群ほか発掘調査団

団長 友野良一 (日本考古学協会会員)

発掘担当者 気賀澤進 ()

調査主任 木下平八郎 (長野県考古学会会員)

調査員 小町谷元 (上伊那考古学会会員)

〃 田中清文 (長野県考古学会会員)

調査団 北澤武志 (長野県考古学会会員)

発掘調査協力員 小木曾ちず 熊谷友子 下村しげ子 下村春江

松崎武一 松崎吉江 宮沢さかえ 宮沢隆一

(順不同・敬称略)

第3節 発掘調査日誌

6月5日(土) 発掘調査準備 機材点検及び手入れ

6月8日(火) 発掘調査準備 機材点検及び手入れ

6月10日(木) 発掘調査機材運搬

6月11日(金) テント設営、上の原Ⅲ遺跡草刈り、試掘用トレンチ設定、午後教育長(調査会会長)
団長出席のもと発掘開始式、1号トレンチ調査耕土より縄文晩期条痕文土器出土

6月12日(土) 1号トレンチ調査遺物少ない、条痕文土器・黒曜石・打製石斧出土

6月15日(火) 1号トレンチソフトローム調査

6月16日(水) 3号トレンチ調査、無文土器・打製石斧出土

6月17日(木) 3号トレンチソフトローム調査、4号トレンチ調査、1号トレンチ地層断面整備

6月18日(金) 2号・4号トレンチ調査

6月22日(火) 2号トレンチ調査、弦生式土器・打製石斧出土

6月24日(木) 2号トレンチ調査F区より集石のある土壤確認、5号・6号トレンチ調査無文土器
・石器出土

6月25日(金) 2号トレンチ集石土壤調査写真、5号・6号・7号トレンチ調査遺物少ない

7月1日(木) 上の原Ⅲ地区北側部分の溝状遺構の確認調査、集石土壤測量

7月2日(金) 溝状遺構確認調査遺物少なくわずかに陶器片が耕土より出土、集石土壤掘り下げ

7月6日(火) 溝状遺構確認調査陶器片・石器出土、集石土壤調査

7月8日(木) 溝状遺構確認調査、集石土壤測量、一部雨堀遺跡草刈り

7月9日(金) 溝状遺構確認調査、雨堀遺跡グリッド設定

7月10日(土) 雨堀遺跡調査開始、グリッド設定、グリッド調査耕土浅く遺物もなし

- 7月14日(木) グリッド調査、地区内周辺道路センターNo30~34を中心に草刈り
- 7月15日(木) グリッド調査、上の原Ⅲ遺跡より続く溝状造構確認のため10mのトレンチ設定調査、調査グリッドの測量
- 7月16日(金) 雨堀遺跡全体測量、溝状造構の確認調査
- 7月17日(土) 小鶴治古墳群調査本日より開始、第7号古墳の周溝調査のためトレンチ設定
昨年度の調査にて北側から東側にかけて周溝を確認しているので、今回の調査では
残された南半部の周溝確認と盜掘が主体部まで及んでいるかの確認調査を行うこと
とした。トレンチは昨年の2本(4・5号)と併せて8本を設定した。雨のため10
時に作業中止、機材手入れ及び遺物洗浄を事務所にて行う
- 7月20日(火) 1号・7号・8号トレンチ調査、周溝内にはふき石が落ちこんだ状態で検出されて
いる、7号トレンチ周溝内より粘土郭の土壠検出
- 7月21日(水) 6号・7号・8号トレンチ調査、7号トレンチ内土壠調査、盜掘溝確認のための3
号トレンチ調査墳丘上部より破損した直刀出土
- 7月22日(木) 2号・3号トレンチ調査、3号トレンチ内部を掘り下げるも土質やわらかく沈み込
んでもしまう状態である。盜掘が予想以上に大規模に行われたのか現地表面より下部
も同様で、これ以上の調査は危険なため調査は中止する
- 7月23日(金) 7号墳周溝測量・写真
- 7月24日(土) 7号墳周溝調査測量
- 7月27日(火) 7号墳周溝調査測量
- 7月28日(水) 7号墳周溝調査測量
- 7月29日(木) 7号墳周溝調査測量
- 7月30日(金) 7号墳周溝調査測量、雨のため昼にて作業中止
- 7月31日(土) 7号墳周溝調査測量
- 8月4日(木) 7号墳周溝調査測量
- 8月5日(金) 7号墳周溝調査測量
- 8月7日(日) 7号墳周溝調査測量
- 8月10日(木) 7号墳周溝調査測量
- 8月11日(金) 7号墳周溝調査測量
- 8月17日(木) 小鶴治古墳群確認調査のための周辺道路予定地調査開始、テント移動準備、周辺道
路センター杭を中心に草刈り
- 8月19日(土) グリッドはセンター杭の近くに任意設定することとし、グリッドの名称はセンター
杭のNoを使用することとする。22~29グリッド周辺草刈り
- 8月20日(金) 天候回復したためテント移動周辺整備、26・27・28・29グリッド調査

- 8月21日(土) 11・12・12'・13・13'グリッド調査
- 8月24日(火) 9・9'・10・10'・17・18・19グリッド調査
17グリッドより頭大位の礫11個検出、2号墳のふき石が周溝内に落ちこんだものと考えられる。他のグリッドよりは遺物出土なし
- 8月25日(水) 22・23グリッド調査、縄文式土器出土、雨堤遠跡テント設置箇所グリッド調査
- 8月26日(木) 5・6・7・7'・8・8'グリッド調査、遺物なし
- 8月27日(金) 20グリッドとその東に1号トレンチを設定、トレンチ内より平盤大きな石があり、周辺が固くしまっている
- 8月31日(火) 1・2・3グリッド(トレンチ)・4グリッド調査遺構・遺物なし、20グリッド・1号トレンチ掘り下げ、黒色土厚い自然の落ちこみかははっきりしない
- 9月1日(水) 20グリッド周辺の調査を続行、22・23グリッド調査、22グリッドにて集石群検出、縄文式土器出土
- 9月2日(木) 22グリッド検出の集石群の範囲確認のため南側にサブトレンチ設定調査集石なし、4号墳西側に2号トレンチ設定調査
- 9月10日(金) 2号トレンチ調査、雨のため3時30分にて作業中止
- 9月11日(土) 2号トレンチ調査完了遺構なし、1号トレンチの北側より須恵器片出土、黒色土は北では段々と浅くなる
- 9月16日(木) センター杭19-20の間に3・4・5号トレンチ設定し調査する、1号トレンチ西側5号トレンチより頭大位の自然石が検出され土師器の高壙が出土
- 9月17日(金) 5号トレンチ内検出の礫群は2列に並ぶものと思われる
- 9月21日(火) 5号トレンチ内検出の礫群調査、西側を拡張礫は直線状に2列に並び内部より土師器・須恵器がまとまって検出される。石室状遺構とする
- 9月22日(水) 石室状遺構精査、雨のため10時30分にて作業中止
- 9月25日(土) 石室状遺構精査
- 10月2日(土) 石室状遺構内遺物取り上げ
- 10月6日(木) 石室状遺構下部調査
- 10月7日(金) 石室状遺構精査・測量
- 10月9日(土) 石室状遺構測量・遺物取り上げ
- 11月2日(火) 小銀治古墳群確認調査範囲が広いため、第4号墳の南側・石室状遺構の西側一帯を便宜上雨洞北地区として、ここに6号から11号までのトレンチを任意設定し調査を行うこととした。6号トレンチ調査
- 11月4日(木) 6号・7号トレンチ調査
- 11月5日(金) 7号トレンチ調査

- 11月6日(土) 6号・7号トレンチの西側に8号トレンチを設定調査、耕土下に近世道路跡と思われる固い面が検出される
- 11月9日(火) 8号・9号トレンチ調査、8号トレンチ南側に黒色土の落ちこみ検出
- 11月10日(水) 9号・10号トレンチ調査、10号トレンチより幅50~80cmの溝状遺構確認
- 11月12日(金) 確認された溝状遺構の拡張確認調査
- 11月15日(月) 溝状遺構の確認調査
- 11月16日(火) 溝状遺構の確認調査
- 11月17日(水) 溝状遺構の確認調査、溝は8号トレンチから北方向に延びほぼ直角に西行する
- 11月18日(木) 溝状遺構の調査、雨のため昼にて作業中止
- 11月19日(金) 溝状遺構の調査、南東部より石器がまとまって出土、溝の北部分南側より頁岩製のナイフ型石器に類似する石器が出土、ローム面までの調査が必要となり、重機による表土はぎをおこなうこととする。また1号・2号古墳の地形測量のため地主さんと打合せ行う
- 12月1日(水) 重機により溝状遺構部分の表土はぎ、上の原Ⅲ遺跡の北側に一部確認されている溝状遺構の確認調査のためのトレンチの表土はぎを終日行う
- 12月4日(土) 雨潤北地区の溝状遺構の全体の確認調査
- 12月7日(火) 溝状遺構の調査
- 12月8日(水) 溝状遺構の調査
- 12月9日(木) 溝状遺構の調査
- 12月10日(金) 溝状遺構の調査、雨のため2時にて作業中止、事務所にて遺物整理
- 12月11日(土) 溝状遺構の調査、溝状遺構北部分南側より黒曜石のブレイドに似た剝片が搅乱層より出土、周囲の調査を行う
- 12月15日(木) 溝状遺構の調査
- 12月16日(金) 溝状遺構北側の11号トレンチ調査
- 12月17日(金) 8号トレンチの南は黒色土が厚く堆積しており、東側の深い落ちこみにつながる自然路と考えられる。雨潤北地区の全体測量、上の原Ⅲ遺跡の北側より確認されている溝状遺構の確認調査に入る。7号古墳の東約40mの所に頭大位の集石が幅2mほどの落ち込みとともに検出される。開墾時に上部を削られた古墳の周構と考えられる。当調査は確認にとどめ後の調査は市の単独事業で行うこととする
- 12月18日(土) 溝状遺構の確認調査
- 12月20日(月) 溝状遺構の確認調査、写真・測量、雪のため4時にて作業終了
- 12月21日(火) 雪のため作業中止、終日遺物整理

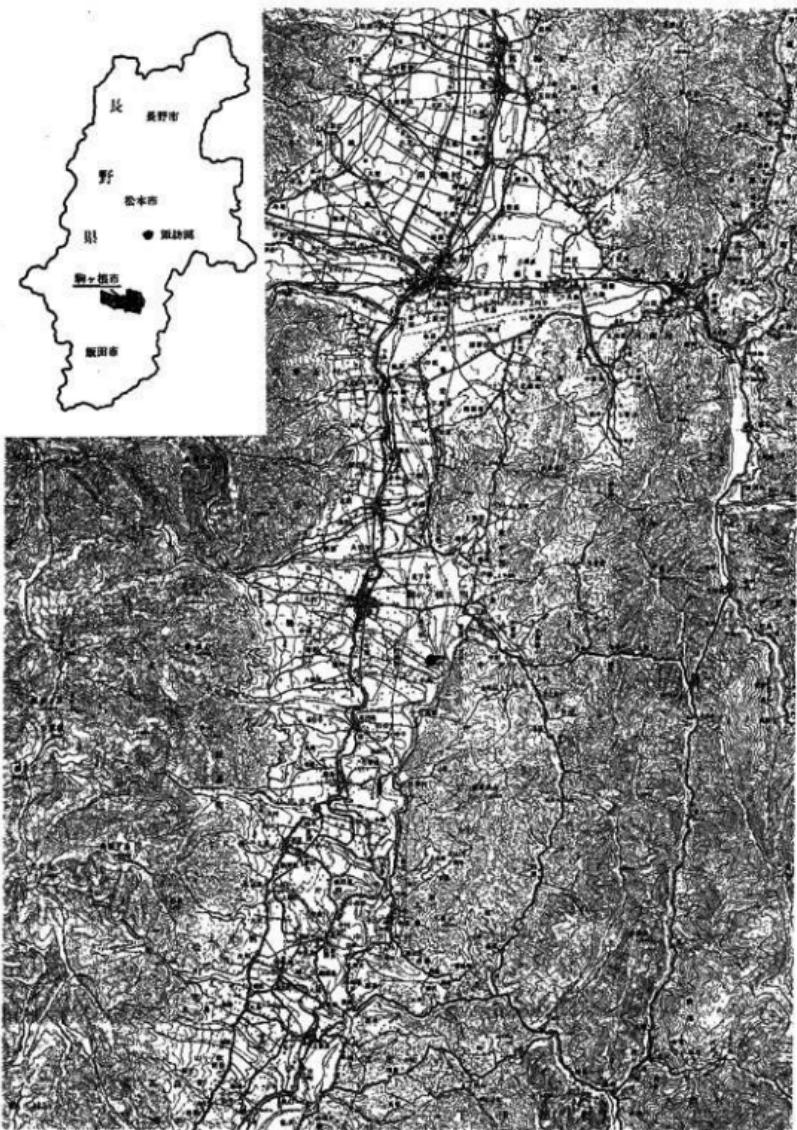
12月22日(水) 溝状造構の確認調査、12・13トレンチ造構確認調査、写真・測量、雪のため3時に
て作業終了

12月23日(木) 15・16トレンチ造構確認調査

12月24日(金) 17・18トレンチ造構確認調査

12月25日(土) トレンチ写真撮影、発掘作業は本日にて終了

(以上 気賀澤)



第1図 上の原III・雨堀・小鋤治古墳群位置図 ($S = 1 : 200,000$)

第II章 遺跡の環境

第1節 地理的位置及び地形地質（第1・2・11図）

伊那谷は、長野県の南部にあり、東には赤石山脈、中央構造線をはさんで戸倉山・高烏谷山を中心とする前山の伊那山脈が並走し、西には木曾山脈があり、天竜川をはさんで南北に並走している。

伊那谷は、この高峻な両側からの過剰堆積により山麓に大小いくつもの扇状地が形成され、山麓から流れ出た中小の河川が天竜川に直交して注ぎ田切地形を造っていることは有名である。

当遺跡群は、駒ヶ根市下平小銀治上の原に所在し、JR小町屋駅の東方2.7km前後の天竜川河岸段丘上に位置する。標高は608~611mを測り、天竜川との比高は60~70mを測る。

南には小銀治沢（七免川）、北には宮沢川が流れ、段丘下には小銀治集落があり天竜川へと続いている。

遺跡のある台地は全体的には南東方向へ緩かな傾きをみせるが、ほぼ中央部にわずかな凹みがみられ雨洞と呼ばれ、かつてなぎ抜けをした所である。今回の調査でも上幅15~25mにわたり、黒色土が厚く堆積しているのが確認されており、自然流路の痕と考えられる。

西側上の原集落を東限としてこの遺跡群一帯には、人家は全く見られず畑作地帯となっている。段丘端から段丘涯は、アカマツを中心とした天然林がみられ、往古はこの一帯もアカマツでおおわれていたものと思われる。

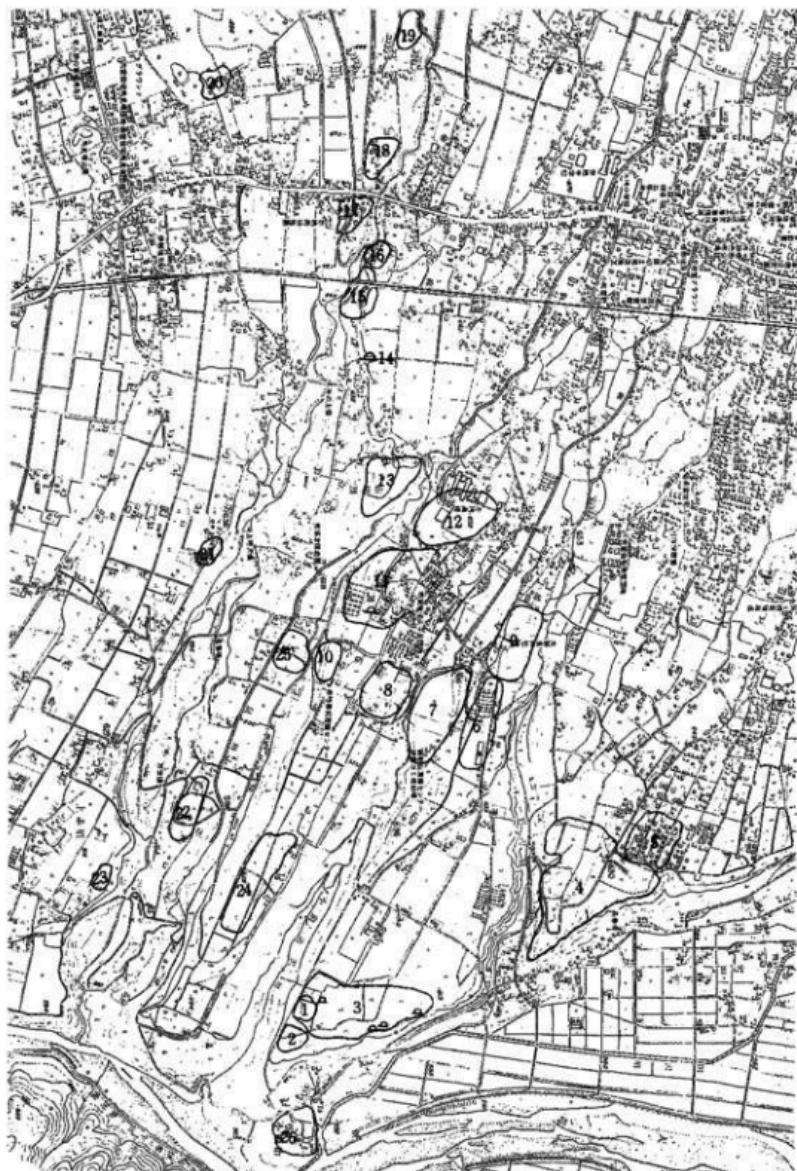
当遺跡の基盤は、花こう岩・片麻岩やホルンフェルスなど西方山地の岩石による礫層の上に約1mの砂質の堆積物が重なり、その上に御岳三岳テフラから上のテフラが堆積している。

層序は上部から20~40cmの表土（耕土）、10cm前後のローム漸移層、40~80cmの軟質火山灰、続いて硬質の火山灰となっている。

第2節 歴史的環境（第2図）

駒ヶ根市の竜西地域（赤穂・下平地区）は天竜川へ注ぐ中小河川の段丘上に数多くの遺跡が分布している。周辺の各遺跡の概要は一覧表のとおりである。以下歴史的な流れに沿って概観することとする。

縄文時代以前の遺跡は、今まで知られる所では今回試掘調査を行った上の原Ⅲ遺跡(1)のみである。



第2図 上の原田・雨堀・小綱治古墳群地形図及び周辺の遺跡 (S = 1 : 20,000)

縄文時代早期の遺跡では舟山遺跡(18)が昭和45・46年度に発掘されており、平安時代までの複合遺跡であるが、早期の土器とともに37基の小堅穴群が確認されたことで有名である。

縄文時代前期では末葉の遺跡がいくつか知られる。羽場下遺跡(19)は、昭和46年度の調査によって前期末葉の住居址が4軒検出されている。羽場下遺跡の東には小町谷遺跡(16)があり、開田時に諸磯期の土器が出土している。当該遺跡群の南対岸北ノ原田遺跡(24)は、小銀治沢に面した北斜面より諸磯期の良好な資料が採集されている。平成3年度に南の台地の試掘調査を行ったが、住居址の確認はできなかった。丸山北遺跡(23)は昭和51年度に調査を行ったが、開田時の破壊により遺構の検出はできなかった。

縄文時代も中期になると遺跡数が多くなり、土器の出土がみられる。原垣外遺跡(11)は中期後葉を代表する遺跡で、住居址30軒と土壙330基余が検出されている。北対岸の七免川遺跡(7)からも該期の住居址4基が発見されている。

縄文時代後期になると遺跡数も極端に少くなり、住居址の検出はなく、七免川遺跡(7)、荒神沢遺跡(15)・舟山遺跡(18)・十二天遺跡(20)・北ノ原III遺跡(24)から土器が発見されるのみである。内、十二天遺跡出土土器は、上伊那の標式土器として知られている。

縄文時代晩期から弥生初頭期の遺跡としては、舟山遺跡(18)・七免川遺跡(7)・如来寺遺跡(17)・荒神沢遺跡(15)がある。特に荒神沢遺跡は該期の標式ともなる重要な遺跡で、遺構も住居址1軒・土壙262基・炉址1基・ロームマウンド4基が検出されている。上穂沢川を挟んで対岸の如来寺遺跡出土の土器は、かつて晩期を代表する標式として知られていた。

赤穂地区の弥生時代中～後期の遺跡は少ない。舟山遺跡(18)からは後期の住居址が3基検出されている。

竜西地区の古墳は、丸塚古墳(14)・原垣外古墳(11)・中通り下古墳(22)・小銀治古墳群がある。丸塚古墳は1基、原垣外古墳は3基あったとされているが、ともに消滅し詳細は不明である。中通り下古墳(22)は全く記録になかったが、昭和53年度の調査によって周溝が検出され古墳と確認された。周溝内からは多くの土器が一括出土し、6世紀初頭を下らない時期のものと考えられる。また古墳時代末の住居址13軒も発見されている。小銀治古墳群(3)については後述する。

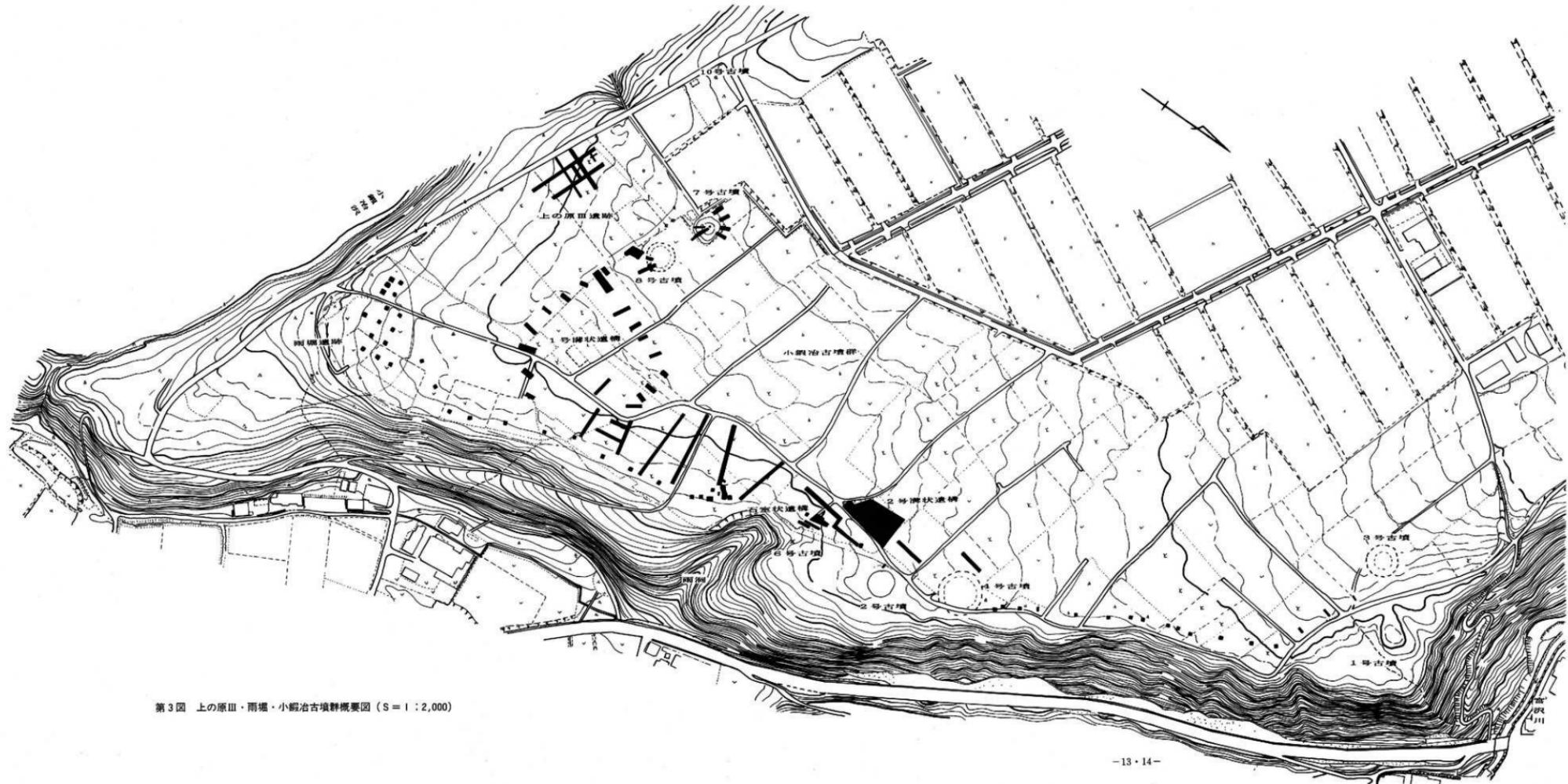
奈良・平安時代の遺跡も多く知られている。中通り下遺跡(22)では、奈良時代の住居址11軒・平安時代の住居址4軒が検出されている。また昭和30年代の道路工事中に灰釉双耳壺（市指定）など出土し、古墳時代から続く大集落が存在したものと考えられる。原垣外遺跡(11)では、奈良から平安時代の住居址12軒が、七免川遺跡(7)では奈良から平安時代の住居址が5軒と平安時代後期の住居址9軒が検出されている。さらに当該遺跡群の西側丘陵上の御射山遺跡(6)からは、平安時代の住居址が9軒発見されている。御射山遺跡の西には美女ヶ森大御食神社があり、境内からは古墳時代・平安時代の遺物が出土し美女ヶ森遺跡(9)がある。当神社には「日本武尊が東国蝦夷を征伐しての帰途、この里にしばらく滞在し、その折豪族赤須彦が杉の大樹のもとに仮宮をもう

け酒をもてなしたという」言い伝えが残っている。又当地西方600mには明治末に当社に合祀された日本神社があった所である。この付近一帯に多くの古墳時代から平安時代の遺跡があることからも「東山道」との関連で興味深いものがある。

中世以降の遺物は各地で散見している。七免川遺跡(?)からは火葬墓が検出されている。当該遺跡群の北宮沢川の北岸には、市内有数の規模を持つ赤須城跡(4)がある。河岸段丘突端部を利用した連郭式平山城で、東西650m・南北500mを測り、8本の堀がある。雨堀遺跡(2)も中世の城館址と考えられているが、主体は今回の調査区域より一段下った所である。

上の原田遺跡・雨堀・小鍛冶古墳群周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良・平安	中世近世	備考
1	上の原Ⅲ	先土器?	○中				H.5年度発掘
2	雨堀					○中世	H.5年度発掘
3	小鍛冶古墳群	○		○		○中近世	H.4・5年度発掘
4	赤須城跡	○中	○後		○平安	○中近世	S.54-62,H.3年度発掘
5	伴城平	○中				○中近世	S.49年度発掘
6	御射山	○中			○平安	○中世	S.50年度発掘
7	七免川	○中後晩	○前中	○	○平安	○中世	S.54年度発掘
8	原垣外北原	○中			○平安		
9	美女ヶ森	○中		○	○平安	○中世	
10	光徳	○			○平安		
11	原垣外(古墳群)	○		○	○奈良・平安		S.52年度発掘
12	赤穂高校	○中			○平安		
13	尾崎	○中					
14	丸塚古墳			○			大正年間に破壊
15	荒神沢	○中後晩	○中				S.53年度発掘
16	小町谷	○前					
17	如来寺	○晩					
18	舟山	○早前後晩	○前後				S.45・46年度発掘
19	羽場下	○前					S.46年度発掘
20	十二天	○後					
21	放下					○中世	
22	中通り下			○	○奈良・平安		S.53年度発掘
23	丸山北	○前中	○後				S.51年度発掘
24	北ノ原Ⅲ	○前中後				○中世	H.4年度発掘
25	中通り上	○中			○平安		
26	小鍛冶		○後		○平安		



第3図 上の原田・雨堀・小綱治古墳群概要図 (S = 1 : 2,000)

第三章 試掘調査

第1節 調査概要(第3図)

今回調査対象区域内には、上の原Ⅲ遺跡・雨堀遺跡・小銀治古墳群があるが、遺物の採取が少なく遺跡の範囲については明確となっていない。今回の調査では、第3図に示すように台地の南西部、かつて先土器時代末葉の尖頭器？8点と頁岩質の縦長剣片1点が採集された地点を中心に南北80m・東西100mの範囲を上の原Ⅲ遺跡とした。北限は第7号古墳の南にあたる。上の原Ⅲ遺跡の北境に溝状造構が検出され、当初上の原Ⅲ遺跡の範囲として一部調査を行った(8号トレンチ)が、後の調査において溝状造構が東側と北側の広い範囲に及ぶことが判明したため、これについては、時期的にも上の原Ⅲ遺跡とは異なるため、小銀治古墳群の範囲に取り込むこととした。雨堀遺跡は、主体は今回の調査区域の東側一段下がった所にあるもので、西の限界を知る意味で台地の東側を通る農道付近までを範囲とした。

小銀治古墳群は、大正年間の鳥居龍藏博士の調査の折にも広範囲にわたって古墳の存在が知られているため、台地の残る部分を一応対象として調査を行うこととした。

ここでは大きな各遺跡の範囲区分について触れ、各遺跡の調査方法は各項において述べることとする。

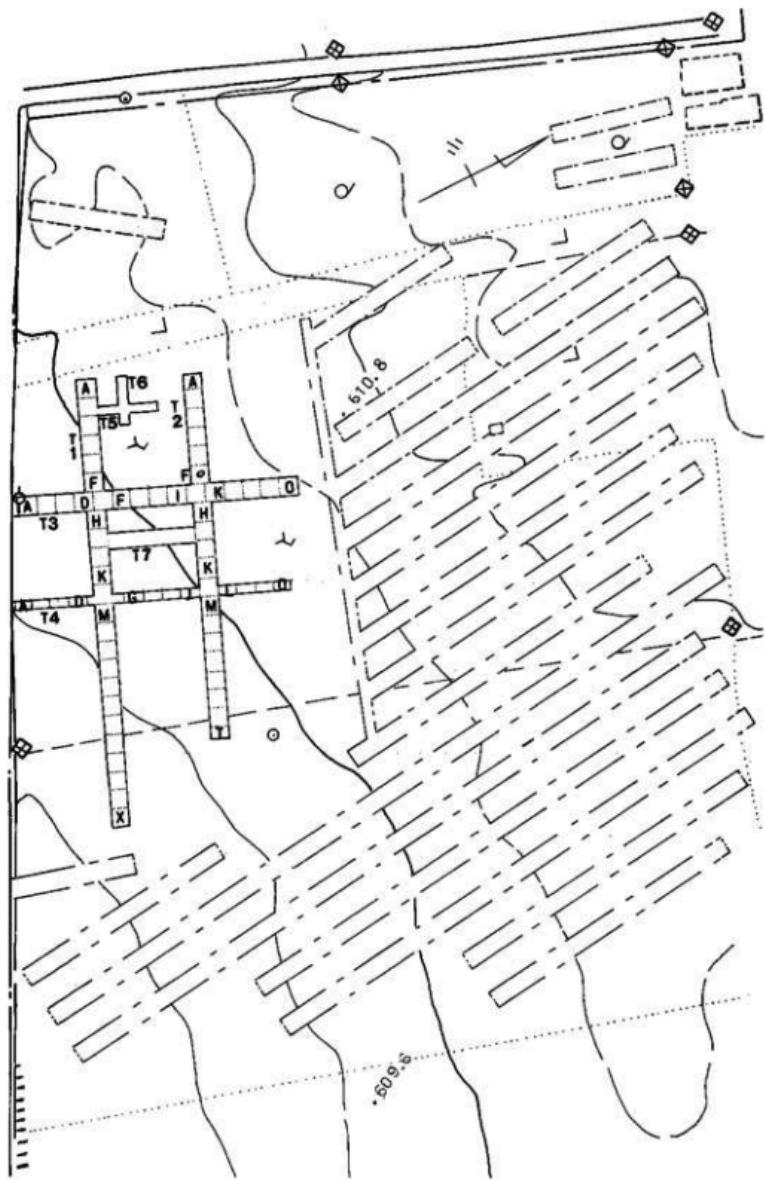
第2節 上の原Ⅲ遺跡

1. 調査方法と概要(第3～6図)

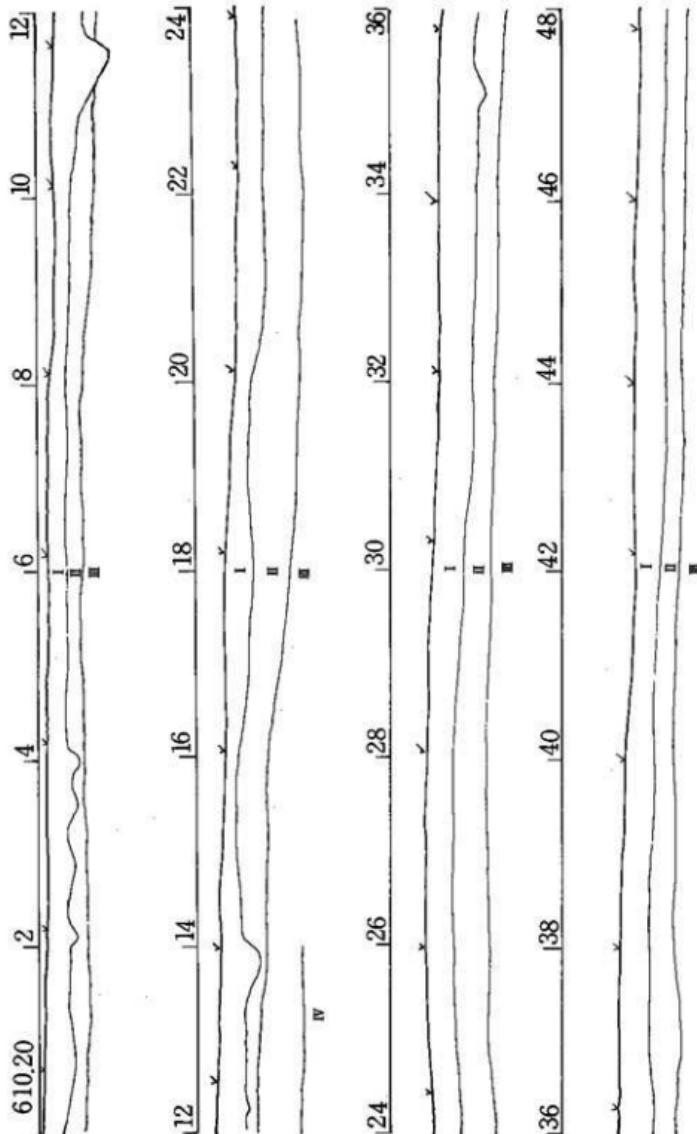
上の原Ⅲ遺跡は、昭和41年度に故下村修氏によって、黒耀石製の尖頭器？8点と頁岩質の縦長剣片1点が採集されている。※1 これによって、市内にも御子柴型石器の存在が知られたのである。この折の発見は彼の報文に詳しいが、いずれも桑園の掘り上げられた土の中からの出土であり、遺跡の正式な調査が望まれていたものである。出土地点はその後の彼の不慮の死によって明らかではないが、かつて彼に何回か現地を案内してもらったことのある田中清文氏によると、第4図の1号トレンチK区付近とされている。

遺跡はわずかに南東に傾斜する台地の中央部で、市道小銀治線をへだてて南に小銀治沢があり、東方段丘溝までの距離は推定出土地点から220m程である。

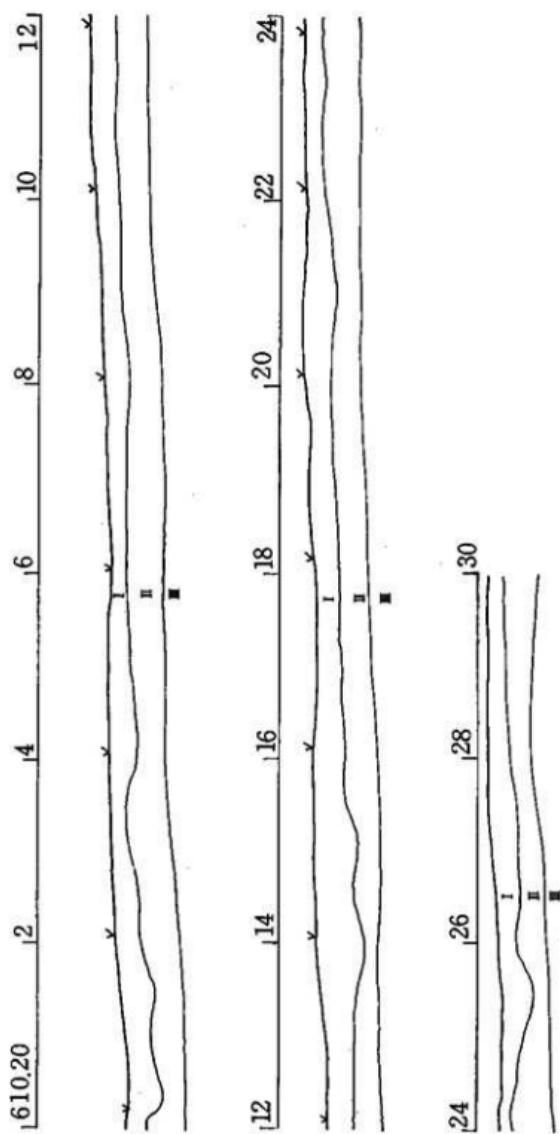
当遺跡を含む上の原地区に工場団地計画が持ち上がり、保存区域を設定するための試掘調査を行うこととなり、平成4年度において推定出土地点の北側と東側の周辺にトレンチ(第4図破線部)を設定して行うとともに、南側を走る市道改修工事部分についても発掘調査を行ったが、小



第4図 上の原III遺跡発掘概要図 (S = 1 : 600)



第5図 上の原Ⅲ遺跡Ⅰ号トレンチ地盤断面図 ($S = 1 : 60$)



第6図 上の原遺跡4号トレンチ地層断面図 ($S = 1 : 60$)

量の土器片と石斧などを検出しただけであった。(この分の報告書は平成6年度刊行予定)

平成5年度は、思いきって推定出土地点に近い部分の試掘を行い、様相を明らかにし保存の範囲を設定しようとのことで、文化庁補助事業として実施した。

調査方法は、東西に2本幅2mのトレンチ（1号・2号）を、さらにそれに直交する南北トレンチを3本（3号・4号・7号）設定し、西側にはサブトレンチ（5号・6号）を入れた。各トレンチは、南ないし西を基点として2m毎にA・B・Cをふり、1号トレンチ○区（1T-A・B……区）とした。

掘り下げは遺物の性格上全て手掘りで行い、各トレンチともソフトローム面から下へは20cmほどまで掘り下げることを原則とし、一部ハードローム層を掘り下げることした。検出された遺構・遺物は後述するとおりであるが、今回の試掘によても先土器時代の石器は全く検出できなかった。この結果を踏まえ、市の単独事業の全面発掘に切り換え、1号トレンチP～2号トレンチP区を結ぶ線から西を全面調査を行い、ハードローム面までの調査を行ったが、やはり先土器時代の石器は検出されなかった。

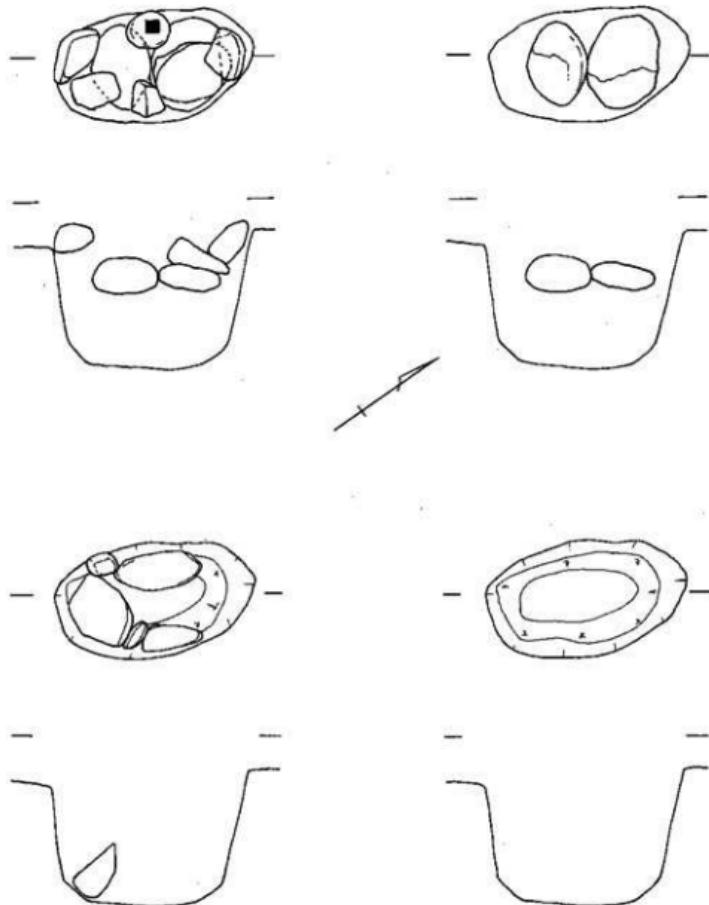
推定出土地点から南は後世綠地帯として残すこととし、将来的には記念碑的なものを建てて保存することとした。

トレンチの層序については、1号トレンチ（第5図）・4号トレンチ（第6図）に示してあるが若干ふれておく。第I層は耕作土で20～25cm前後の厚さを持っている。先土器時代の石器が桑畠の掘り上げられた土より発見されたとのことで、桑を植える際にかなりの深耕があったものと考えられたが、一部にソフトローム面までの擾乱が及ぶ程度で、予想に反し意外とプライマリーな状態を示している。耕作土の下は平均10～15cmの暗褐色土の漸移層（II層）があり、ソフトローム層へと続いている。1T-1区から0区にかけて、II層は20～25cmとやや厚く中だるみ状の堆積をみせている。

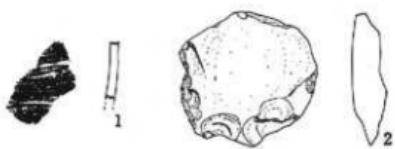
（気賀澤）

2. 造構と遺物（第7～9図）

今回の調査で検出された造構は、2T-F区の土壤1基のみである。平成4年度の調査において土壤1基が確認されているため、今調査検出土壤を2号土壤とした。



第7図 上の原田遺跡第2号土壤実測図 ($S = 1 : 20$)



第8図 上の原Ⅲ遺跡第2号土壙出土遺物
(1は1/3、2は1/6)

その間をわずかに炭化物を含んだ黒色土が充満している。内部の石は全部で12個あるが、■で示した硬砂岩以外は花崗岩と砂岩である。他に土器1片(第8図-1)と黒曜石の剥片が4点出土したのみである。

第8図-1は唯一出土した土器で、櫛状工具による条痕文がみられ、胎土中には長石が含まれ堅緻な焼きを示している。一部炭化物の付着がみられる。弥生時代前半の壺形土器である。

第8図-2は硬砂岩で、片面に自然面を残した大きな剥片で、3箇所に大きな打撃痕がみられる。石器加工用の原材料として持ち込まれたものであろう。

土壙の時期については、出土土器が第8図-1の1片と少なく決め難いが、周囲からも該期の土器が出土していることから、弥生時代前半(庄の烟~北原期)と考えて良いだろう。(木下)

(2) レンチ出土遺物(第9図 図版16)

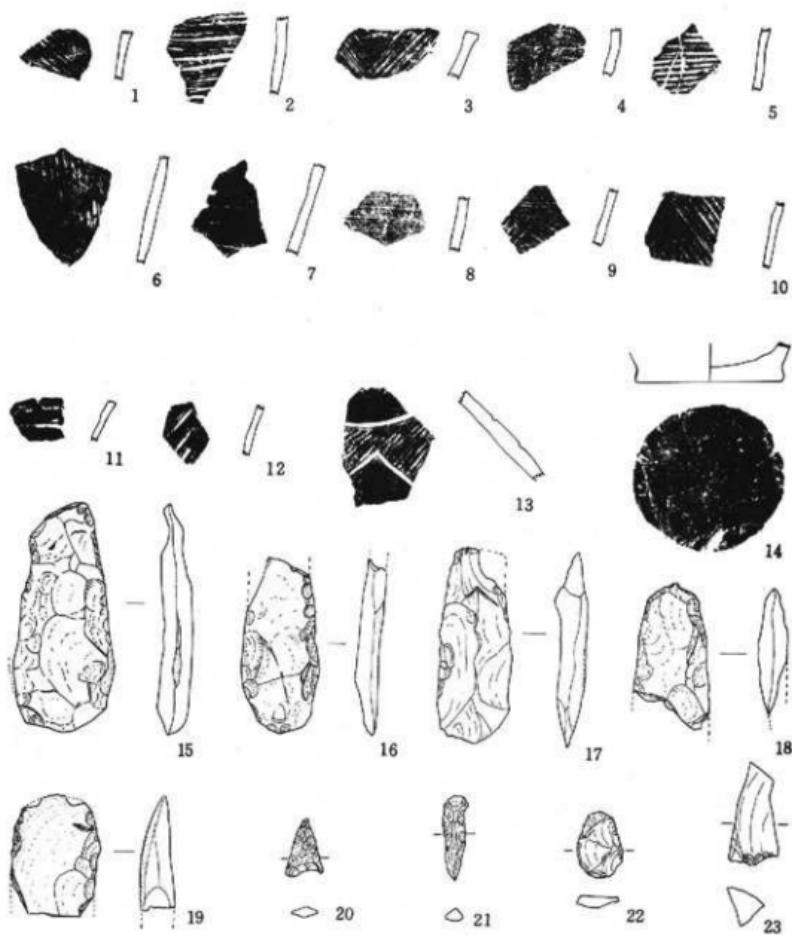
遺構外いわゆるレンチ出土の遺物は一覧表に示したとおりである。すべて第1層耕作土から出土したものである。総体的にみると、今回の調査区の西側に多く出土している。遺物は土器28点・打製石斧5点(第9図-15~19)・石礫1点(第9図-20)・石錐1点(第9図-21)・剥片石器2点(第9図-22・23)と少ない。他に黒曜石の剥片8点と硬砂岩の剥片2点と粘板岩の剥片1点が出土している。

土器は大半が小破片で器形を知り得るものは少ない。繩文式土器の5片を除けば、他は弥生式土器である。第9図に示すように、櫛状工具によって旋文するものが主体である。13は壺形土器の破片で、沈線で区画した中を繩文がうめている。14は壺形土器の底部で、布目圧痕を持つ。布目圧痕を持つ土器は、市内では初めての出土である。

小片のため定かでないが、総じて弥生時代庄の烟期から北原期にかけてのものと考えられる。

(木下)

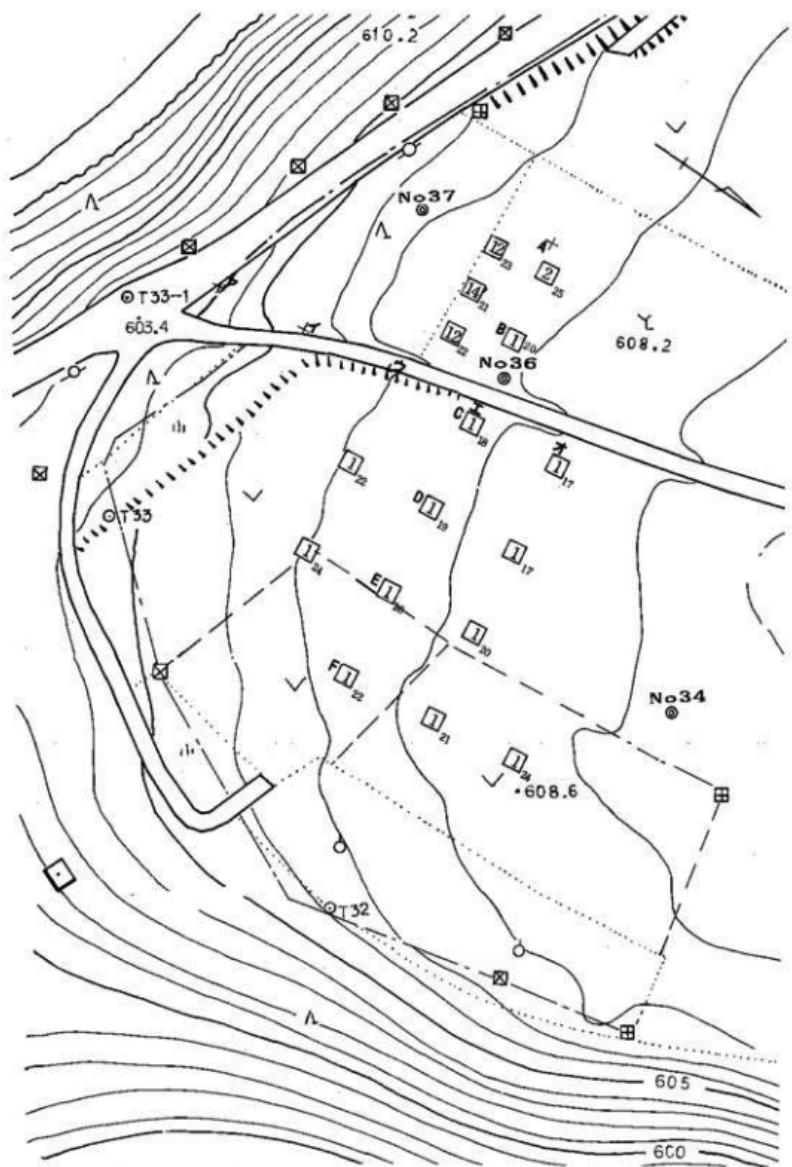
*1 下村修「長野県駒ヶ根市発見の石器について」ブレリュード19所収 旧石器文化談話会
昭和49年



第9図 上の原III遺跡トレンチ出土遺物（1～19は $\frac{1}{3}$ 、20～23は $\frac{1}{2}$ ）

上の原 III 遺跡出土遺物一覧表

No.	種類	出土場所	挿図番号	備考
1	土器	2号土壤	8図-1	弥生 櫛状工具による条痕文
2	剥片	"	-2	硬砂岩
3	"	"		黒曜石
4	"	"		"
5	"	"		"
6	"	"		"
7	土器	1T-A		無文 底部
8	"	"		無文
9	"	"	9図-1	弥生 櫛状工具による条痕文
10	"	"	-2	" "
11	"	1T-D		弥生? 擦痕あり
12	"	"		弥生 櫛状工具による条痕文
13	"	1T-E	-3	" 櫛状工具による縞衫文 口縁部
14	"	"	-4	" 櫛状工具による条痕文
15	"	"	-5	" 櫛状工具による条痕文
16	"	"	-6	" "
17	"	"	-7	" "
18	"	1T-F	-8	" " 19と同一か
19	"	1T-E	-9	" " 18と同一か
20	"	"	-10	" 櫛状工具による縞衫文
21	"	"	-11	" 櫛状工具による条痕文 口縁部
22	"	1T-F	-12	" 櫛状工具による縞衫文
23	"	1T-G		" 櫛状工具による条痕文
24	"	1T-O		縞文? 無文
25	"	3T-H	-13	弥生 壺 縞文と沈線区画文
26	"	2T-E	-14	" " 布目圧痕を持つ底部
27	"	3T-D		土師 壺 口縁部
28	"	3T-G		弥生 櫛状工具による条痕文
29	"	"		" 無文
30	"	"		縞文 沈線文
31	"	4T-A		" 無文
32	"	4T-D		" ? 沈線文
33	"	4T-E		" 縞文 底部
34	"	5T-D		弥生 櫛状工具による条線
35	剥片	1T-D		黒曜石
36	"	"		"
37	"	1T-E		"
38	"	"		"
39	"	1T-F		"
40	石錐	1T-F	9図-21	"
41	剥片	1T-G		"
42	打製石斧	1T-H	-16	硬砂岩 頭部欠
43	"	1T-J	-19	" 刃部欠
44	鶴片	2T-A		黒曜石
45	"	2T-C		"
46	打製石斧	2T-E	-17	緑色岩類 頭部一部欠
47	"	3T-J	-15	硬砂岩 側面欠
48	石錐	4T-A	-20	黒曜石
49	剥片石器	4T-B	-22	"
50	剥片	4T-D		硬砂岩
51	"	4T-E		粘板岩
52	磨石	5T-B		赤色チャート
53	剥片石器	"	-23	黒曜石
54	打製石斧	5T-D	-18	硬砂岩 刃部欠
55	剥片	6T-B		"



第10図 雨堀遺跡発掘概要図 ($S = 1 : 600$)
 (小文字はソフトロームまでの深さを表わす)

第3節 雨堀遺跡

1. 調査方法と概要（第10・11図）

雨堀遺跡は、上の原地区の南東部にあり南側には小糸治沢が流れている。遺跡の主体は、今回の調査地点の東側一段下がったテラス状にあって、現在はアカマツとヒノキの混生林となっている。林内は南北に傾斜し、テラスの規模は東西方向110m、南北方向60mを測る。

林内に一部堀らしき痕跡があり、北にある赤須城との関連の出城的なものではないかとされているが、本格的な調査を行っていないので詳細は不明である。

今回の調査区域からかつて中世陶磁器片が採集されており、一体の遺跡として登録されている。

調査方法はグリッド方式により、ほぼ南北方向に10m毎にア・イ・ウ……、東西方向にA・B・Cとして、中を2m毎のグリッドとして、基本杭の南西角から1~25のグリッドを設定した。グリッドの呼び方は、ウーA-1となる。

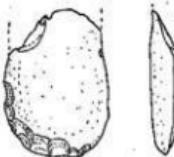
10×10m四方に一箇所計16グリッドの試掘を行ったところ、遺構は全く検出されず、遺物も打製石斧1点のみであったため、これ以上の試掘は必要なしとして調査を終了した。

耕土（I層）は第10図に示すように、20cm前後、深い所（エ-A-2）で25cm、浅い所では17cm（オ-C-1・オ-D-1）と総じて浅い。耕土下にはほとんど漸移層がなくローム層へと統き、ローム面が一度削られたかのように固くなっている箇所が多くみられた。

先述したように、遺構は全く検出されていない。

遺物は第11図に示す打製石斧1点のみである。頭部を欠き硬砂岩製である。片面に自然面を残したものである。

第11図 雨堀遺跡出土
石器
(S = 1/2)

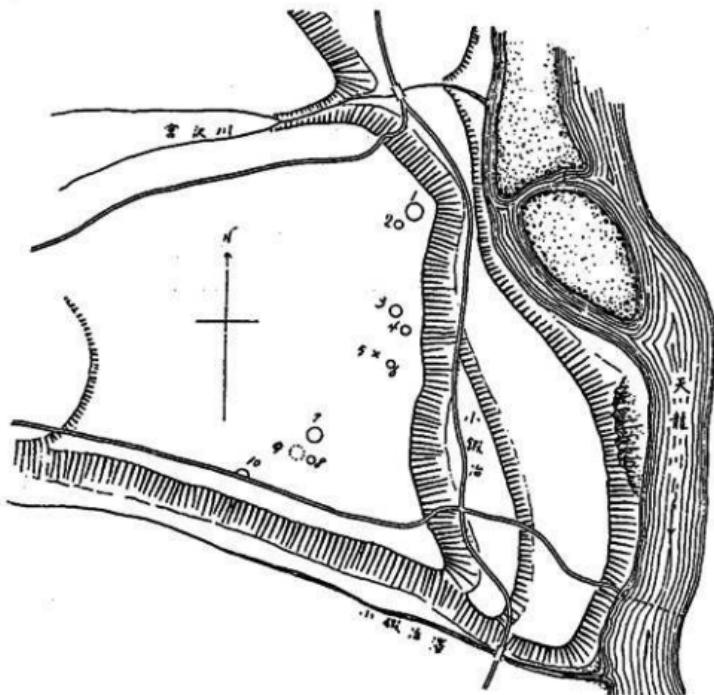


第4節 小銀治古墳群

1. 小銀治古墳群について

小銀治古墳群の調査は、大正年間の鳥居龍藏博士の調査に始まる。その折に第12図に示すように9基（1～4・6～10）と遺物採集地点1地点(5)が確認されている。その時点では9号古墳は消滅し、10号古墳も半壊していることがわかる。この後の開墾によって、2号古墳と8号古墳は完全に消滅して全く面影を残していない。6号古墳は山中に大きな石を残すのみとなりわずかに原位置をとどめるのみで、10号古墳はその後の道路拡張によって完全に消滅している。

現在古墳としては原形をとどめているのは、1号・3号・4号・7号古墳の4基を残すのみ



第12図 鳥居龍藏博士調査時の古墳位置図（先史及び原史時代の上伊那より）

で原位置のわかる6号・10号古墳をあわせても6基が確認されるのみである。

昭和45年、残る古墳を市の史跡として指定を行った。古墳の番号については、個々に現存する古墳に番号をつけていたため、混同することが多く問題があるので今回番号を新たに振り直した。

番号は1号(鳥居1号)・2号(4号)・3号(2号)・4号(3号)、以下は鳥居博士の番号を使うこととした。以下新番号で記述して行くこととする。

2. 調査方法と調査概要(第13-18図)

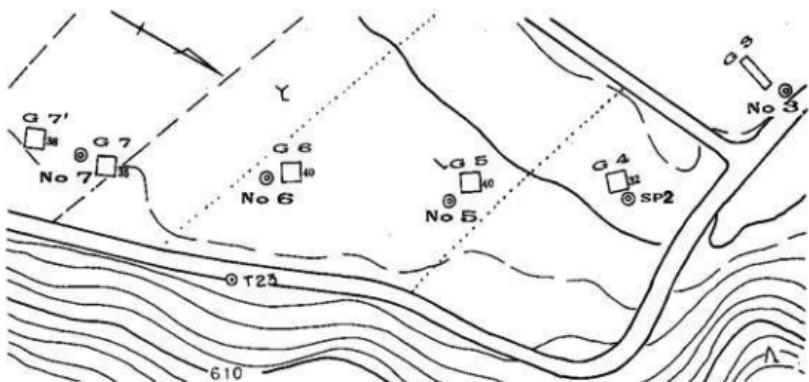
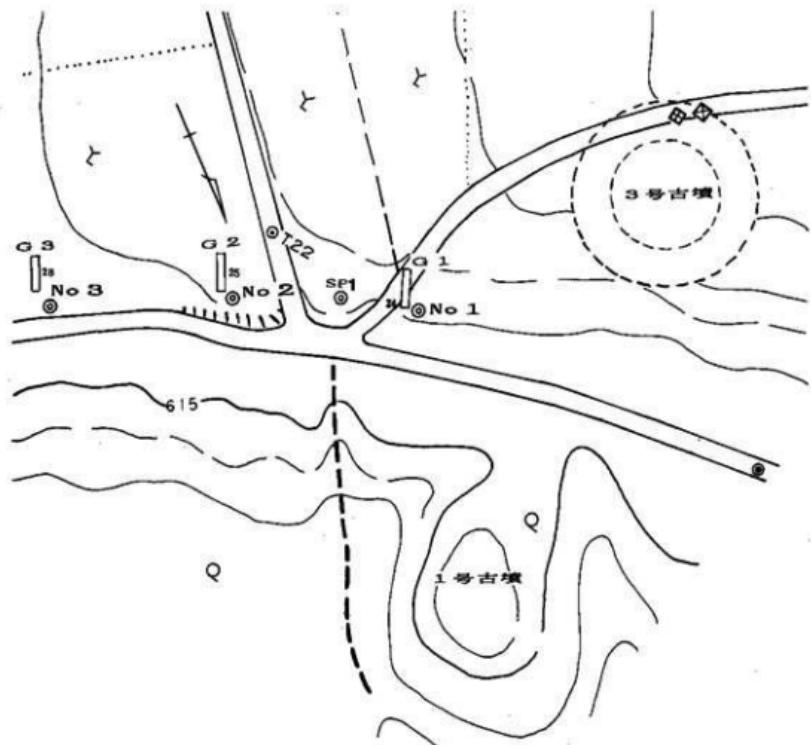
今回の調査は、古墳の確認調査を主体としたもので、広範囲にわたっている。台地の縁辺部は周辺道路のセンター杭を中心にグリッド方式を用い、遺物・遺構確認をもって一部拡張し遺構の性格を調査することとし、各グリッドはセンター番号を利用、G1………G18とした。内部は平成4年度に実施済以外を1~20までの任意のトレントを設定し、古墳の周溝確認を行うこととした。また公園として残すこととなった7号古墳の周溝の範囲確認調査と用地外にある1号・2号古墳の地形測量、2号古墳の一部周溝確認調査を併せて行った。

確認された遺構は、7号古墳の周溝と8号古墳の周溝の一部、2号古墳の南西部に自然石を並べた石室状遺構1基と2基の溝状遺構が確認された。その他のグリッド及び各トレントからの遺物の出土は少なく、G22の西側拡張区から繩文式土器の細片が5片出土したのみである。

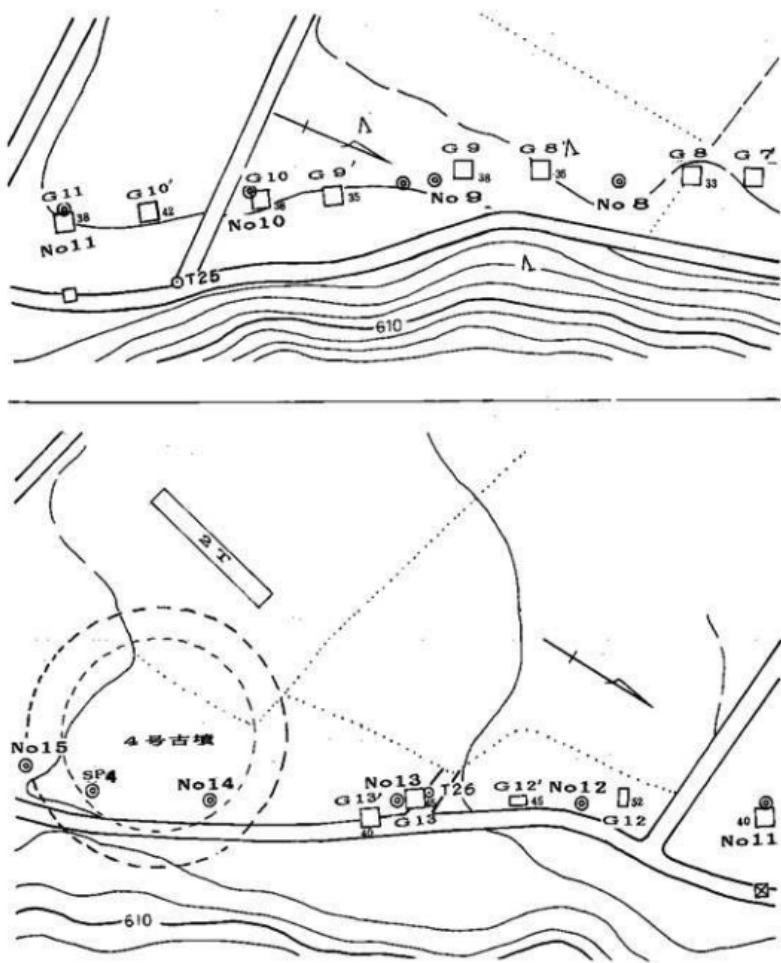
8号古墳の周溝全体の調査は、市単独事業として行っている。さらに3号古墳・4号古墳の調査についても市の単独事業として行い、平成6年度に報告書を刊行する予定である。

各グリッドのソフトローム面までの深さは概要図に示してある。

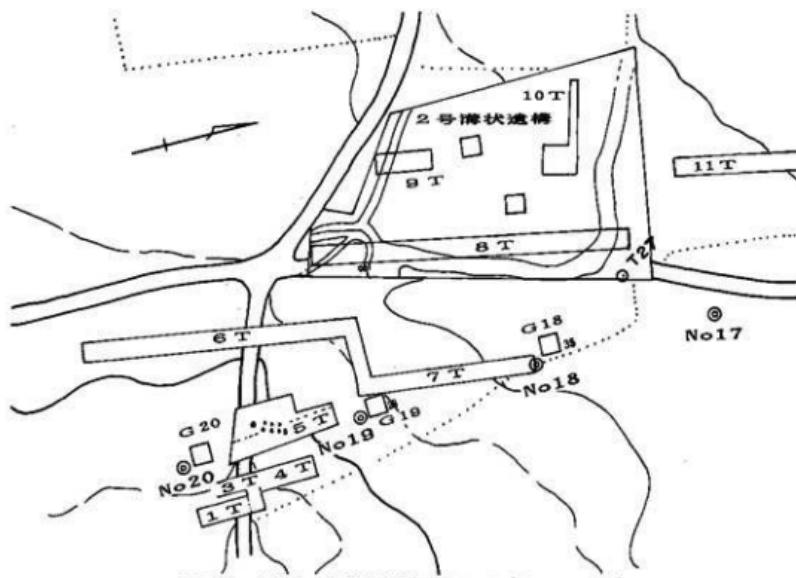
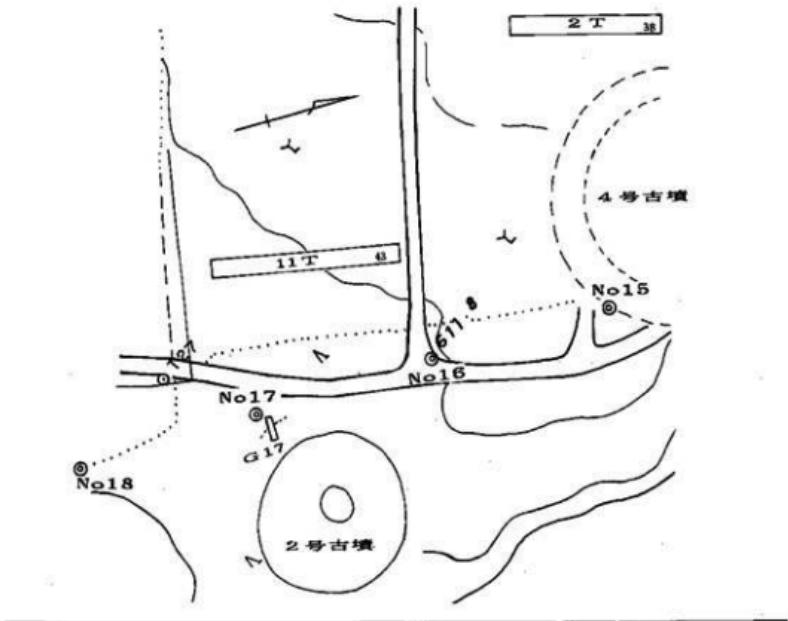
(気賀澤)



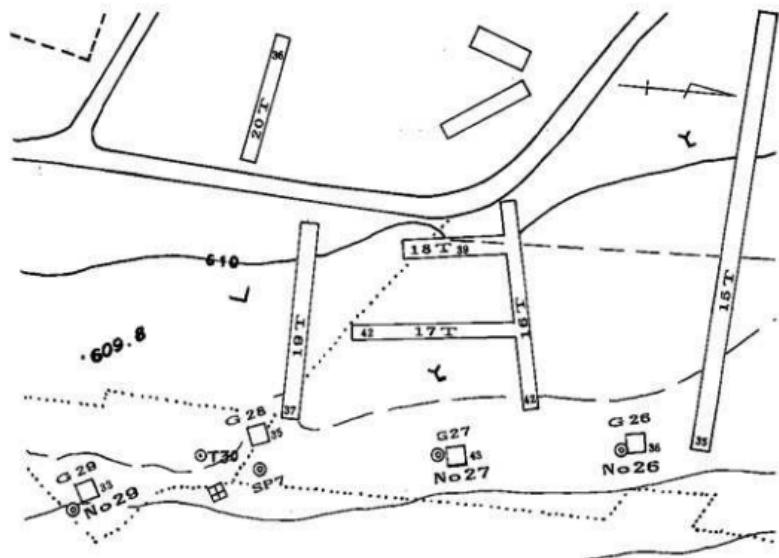
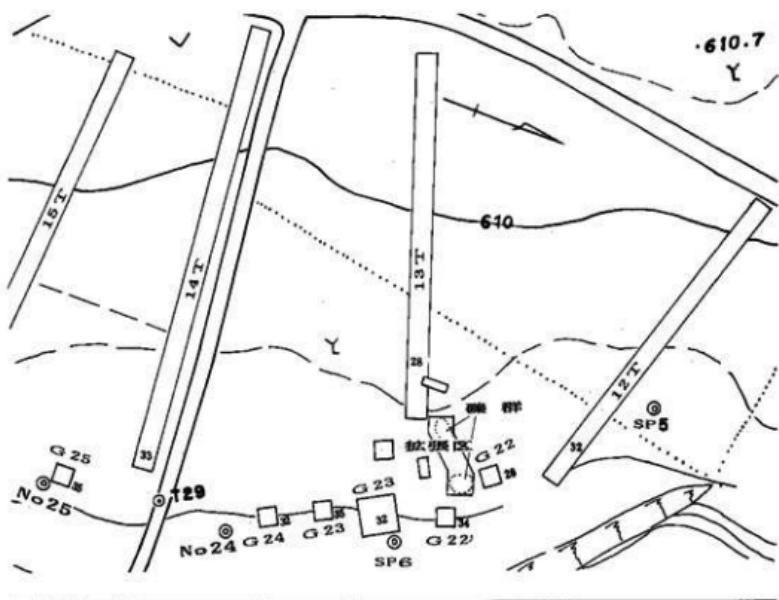
第13図 小鍛冶古墳群発掘調査概要図 No.1 (S = 1 : 600)
(ただし小数字はソフトローム面までの深さを表す、以下同じ)



第14図 小綿治古墳群発掘調査概要図 No.2 (S = 1 : 600)



第15図 小綱治古墳群発掘概要図 No.3 (S = 1 : 600)



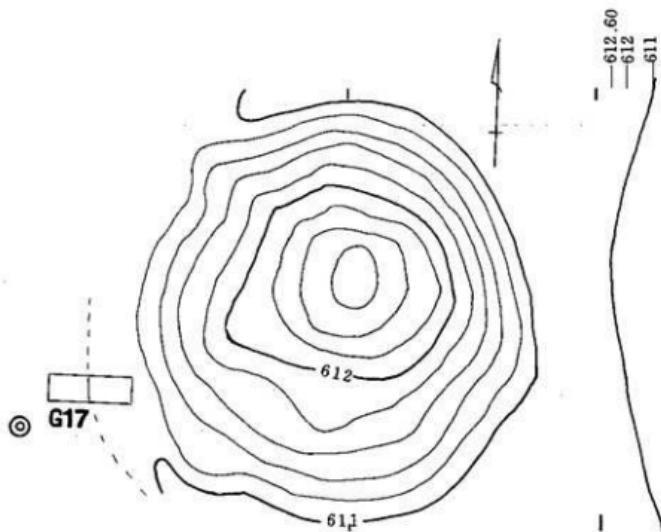
第16図 小鍛治古墳群発掘調査概要図 No.4 (S = 1 : 600)



第17図 小鍛冶古墳群発掘調査概要図 No.5 (S = 1 : 600)

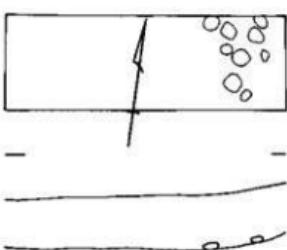


第18図 小綱治古墳群発掘調査概要図 No.6 (S = 1 : 600)



第19図 小綱治古墳群第2号古墳実測図 (S = 1 : 200)

3. 第2号古墳 (第19・20図 図版10・17)



第20図 小鍛冶古墳群第2号古墳G17
トレンチ実測図 ($S = 1:60$)

本古墳は台地中央部縁辺部に位置し、東側はすぐに段丘崖となる。北西に第4号古墳がありその間23mほどを測る。墳丘部は工業団地予定地外となるが、他の古墳との関係を知るために地形測量を行うとともに、西側用地内 (G17トレンチ) を調査し周溝の西限の確認に努めた。

実測の結果、一部墳丘に崩れがみられるが墳丘部径15mを測る円墳である。南西部に盗掘らしき痕跡が認められるが、ほぼ原形をとどめている。墳丘の高さは現高で1.6mを測る。

墳丘の西G17トレンチの試掘結果では、わずかに周溝らしき凹みがみられ、墳裾には葺石がみられている。葺石はローム面から浮いた状態でなく原位置をとどめているものと思われる。

東側は段丘崖がせまり周溝はなかったとも考えられ、西側の浅いことも理解できる。

(気賀澤)

4. 第7号古墳 (第21~27図 図版11~13)

本古墳は第1号から第6号古墳と違い台地の内側に位置し、東側には周溝のみ確認された第8号古墳があり、その周溝間の距離は17mを測る。

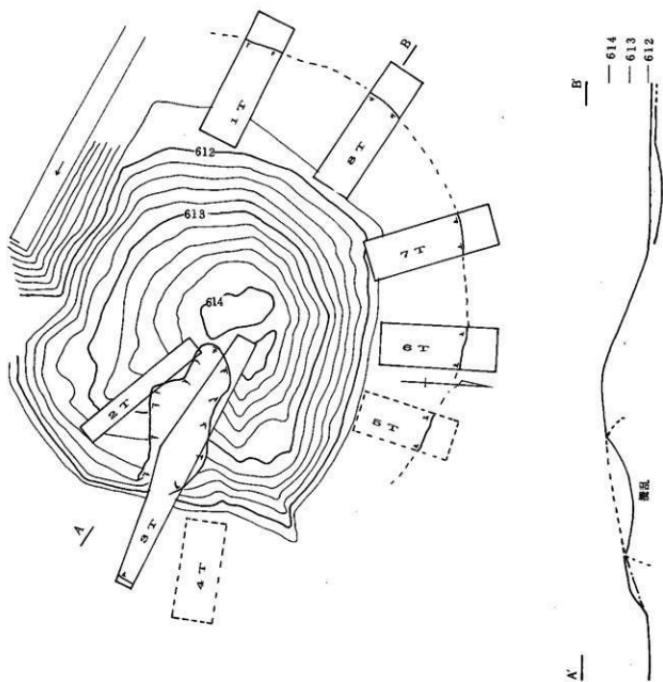
東側は大きな凹みがあり後世の搅乱がうかがわれ、その折に出た土が両わきに盛られており、張り出している。南西部は井水と水田によって、また南東部はイノシシ小屋によってともに壊されている。

墳丘の規模は現況東西18mを測り、径18mの円墳である。周溝の外側は、現墳裾の5m前後に確認されている。東西方向でその距離を測ると27mである。墳丘の高さは現高2.4mである。

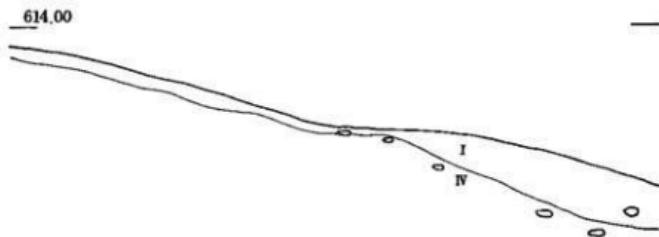
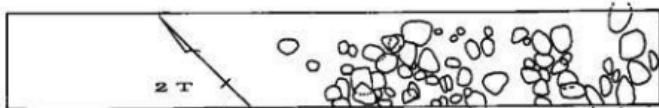
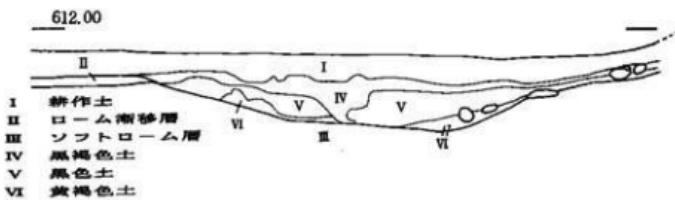
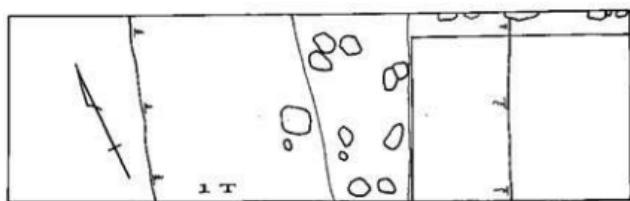
当古墳は公園として保存されることとなっているため、周溝の確認調査と東側の搅乱部がどこまで及んでいるかの確認調査を行った。平成4年度に2箇所 (4号・5号 第21図破線部) の調査も行っている。

周溝の状況は、各トレンチ実測図にみられるように舟底形を呈し、内側はなだらかに墳裾につながっており明瞭ではない。周溝の上幅の確認できたものは第1号と第8号のトレンチのみで、第1号では4m、第8号では5mである。深さは1号で45cm、3号60cm、6号45cm、7号55cm、8号50cmと全体に浅い。

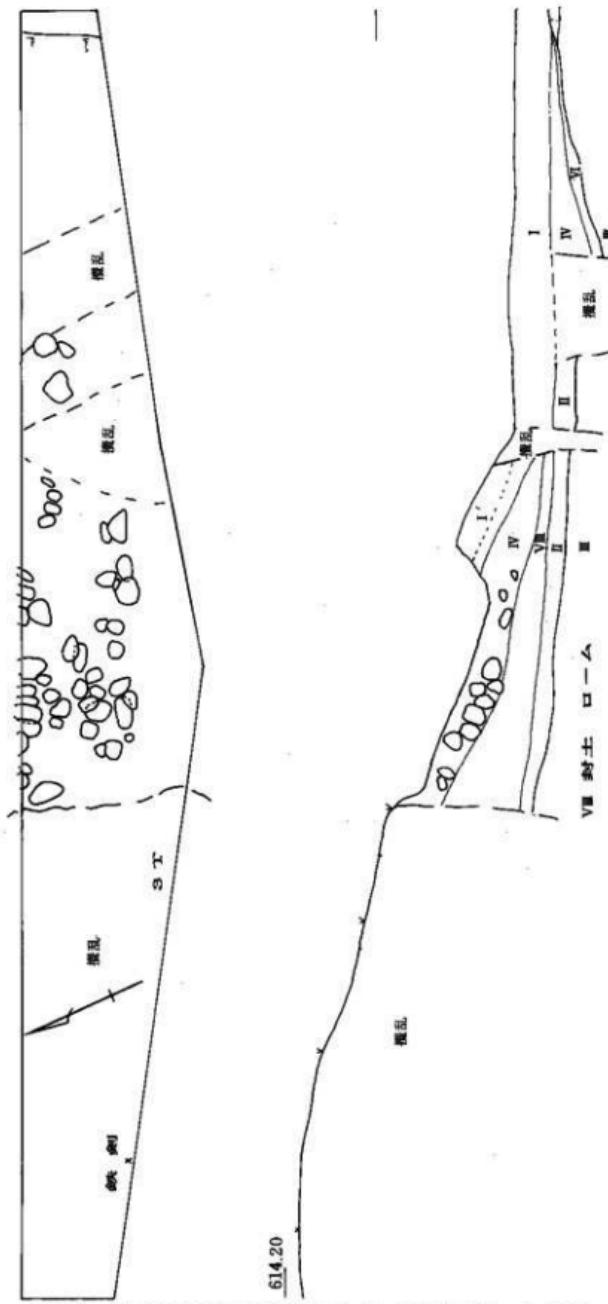
周溝内の内半分には底から浮いた状態で人頭位の自然石が多量にみられ、葺石が流れ込んだものと考えられる。



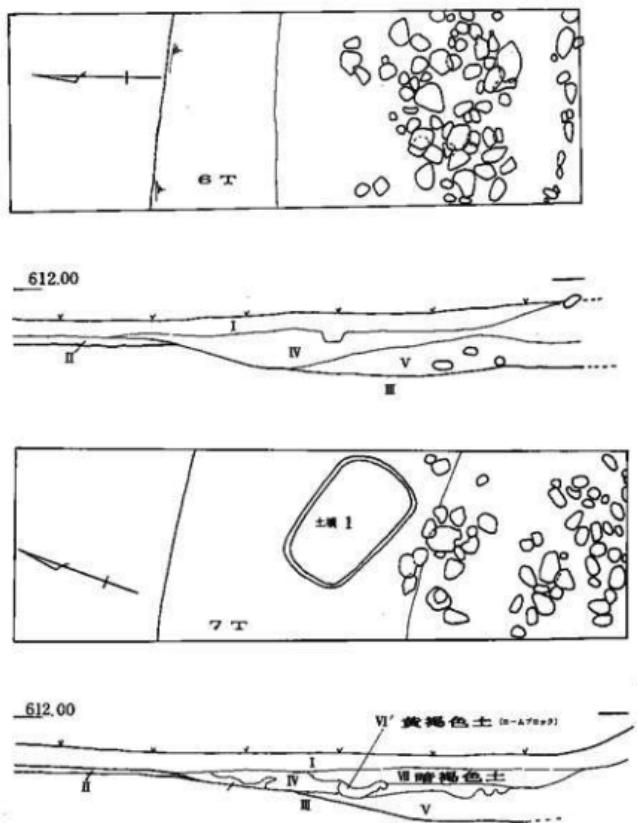
第21図 小継治古墳群第7号古墳実測図 ($S = 1 : 200$)



第22図 小鶴治古墳群第7号古墳1号・2号トレンチ実測図 ($S = 1 : 60$)



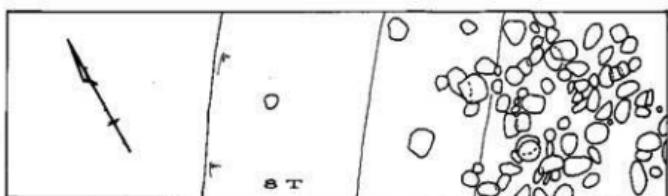
第23図 小綱治古墳群第7号古墳3号トレンチ実測図 ($S = 1:60$)



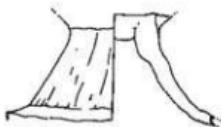
第24図 小綱治古墳群第7号古墳6号・7号トレンチ実測図

墳丘の東側がすでに搅乱されておりその状態を調べるために3号トレンチを設定し、北壁にて断面観察を試みたが、中心部は旧地表面まで掘り込まれておらず墳裾部のみの断面観察となった。旧地表面は見られず漸移層の上にロームが積まれ墳丘を形づくっており、その上に黒褐色土が40~50cm積まれ、葺石はロームを覆う状態で検出されている。ロームは一部ブロック状の所がみられるが、固くしまっている。

墳頂近く現地表面下15cmの搅乱土中より鐵剣（第27図）が出土している。搅乱は広範囲に及ん



第25図 小鍛治古墳群第7号古墳8号トレンチ実測図 ($S = 1 : 60$)



第26図 小鍛治古墳群第7号古墳出土鉄器 (1/3)



第27図 小鍛治古墳群第7号古墳出土鉄器 (1/3)

であり、盜掘によるものと思われる。

なお、7号トレンチ覆土中に粘土郭の土壤（第28図）が検出されている。

遺物は少なく、1号トレンチ葺石に混じて土師器の高環の脚部（第26図）と土師器の妻の頭部や胴部破片10片と2号トレンチより土師器の高環の脚部の一部と先に述べた鉄劍（第27図）のみである。

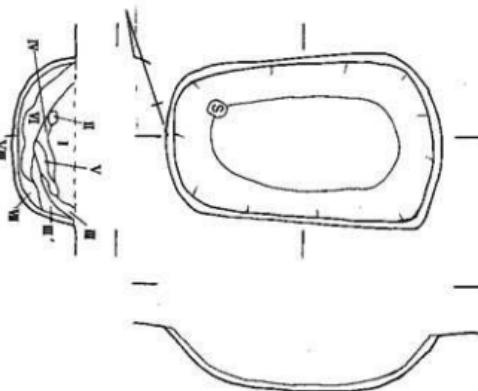
第26図高環ははめ込み式で鋸を欠いている。胎土には長石と雲母が大量にみられ黄褐色土に固く焼かれている。調整は外面タテのヘラ削り痕、内面はナデがみられる。

第27図は断面紡錘形を呈し鉄劍と考えられる。幅は3~4cmで厚さ7mmを測る。両面に木質部を良く残し

ている。

古墳の構築時期は、遺物が少なくはっきりしないが7世紀前後と考えられる。 (木下)

- I 黒褐色土
- II ロームブロック
- III 黄褐色土(ローム粒わずかに含む)
- IV 黄褐色土(ローム粒と炭化物含む)
- V 黒色土
- VI 黑褐色土(ローム粒と炭化物含む)
- VII 暗褐色土(ローム粒と炭化物含む)
- VIII 白黄色粘土



第28図 小鰐治古墳群第1号土壤実測図 (S = 1 : 30)

5. 第1号土壤 (第28図 図版12)

第7号古墳7号トレンチ周溝内覆土中に検出されたものである。幅5cmほどの白黄褐色の粘土を固くつきかためて造られている。プランは長楕円形を呈し長軸は150cm、短軸は東側で95cm、西側はやや短く80cmを測る。断面は舟底形で深さ25cmである。

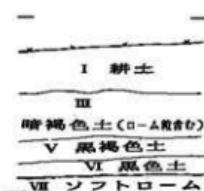
内部は図に示すとおり何層にも分かれるが、人為的に埋設した痕跡はみられない。又内部からは覆土中より礫が1個検出されたのみで、土器等は全く出土していない。

出土遺物がなく時期は不明である。古墳に伴うものとは考えにくい。

(木下)



第29図 小金治古墳群I号トレンチ西壁断面図 ($S=1:60$)



第30図 小金治古墳群
G20西壁断面図 ($S=1:60$)

6. 石室状造構 (第15・29~33図 図版14・15)

(1) 概要と周辺の状況

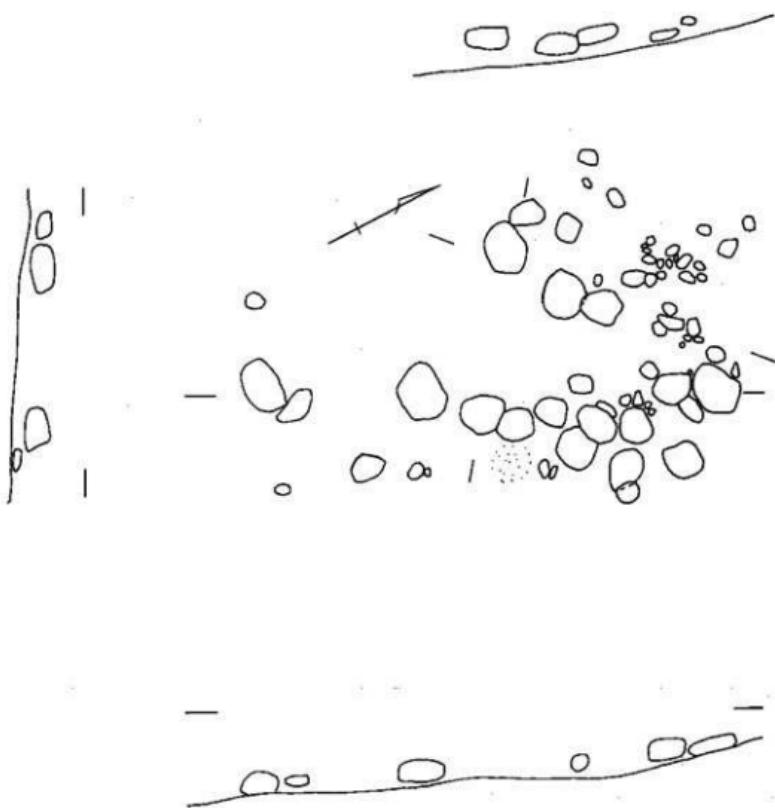
第2号古墳の南側は、大きななぎ抜けの痕があり、雨洞と呼ばれている。雨洞の北側段丘突端部山林中に、一抱え位の花こう岩が2個みられる。ここに6号古墳があった所とされている。島居博士の調査図(第12図)においても第2号(旧4号)古墳の南側に6号古墳があったとされており、古墳として間違いないものと思われる。さらにこの6号古墳の西側にて遺物を探集した(第12図×5地点)ことが記述されているため、この付近一帯を重点的に試掘することとした。

センター杭Na20に 2×2 mのグリッドをさらにその東用地ぎわに幅2mのトレンチ(1号)を設定した。

G20は第30図に示すようにソフトローム層まで120cmと深く南にやや傾斜している。I層の表土も50cmと北側に比べて厚みがあり、北側からの流入がうかがえる。その下にローム粒と砂粒を含んだ暗褐色土が50cm、黒色土20cmの堆積を示している。

1号トレンチの南側表土下に黒褐色土(第29図-I)の堅緻な面が幅2mにわたってみられ、この面は3号・5号・6号トレンチにても同様に検出されている。雨洞を登ってくる作業道がこの付近を通り西の畑につながっていたとのことで、この道路跡と考えられる。南に傾斜するローム層は、トレンチ北端1.3mの地点からすり鉢状に深くなり黒色土が厚く堆積している。崖ぎわにて危険なためローム層の検出まではできなかった。黒色土の上に5cmほどの砂層の堆積があり黒褐色土(第29-V)となる。この黒褐色土は、下層の黒色土を南側にて南から北に切り込むような状態で堆積している。さらにその上に10cmほどの砂層がさらにローム粒を含んだ暗褐色土が堆積している。この黒色土の厚い堆積は、西側の6トレンチにても検出できかつての自然流路の痕と考えられる。

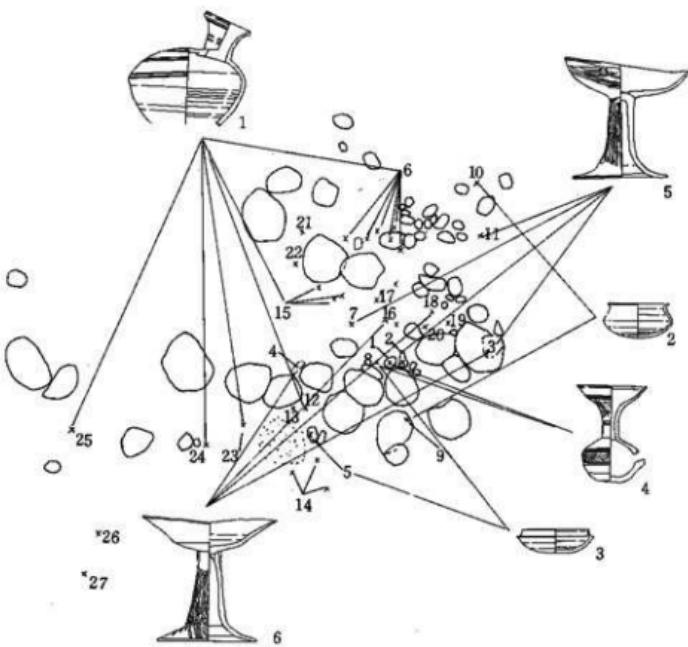
黒色土を掘り込んだ黒褐色土の堆積状態が、何らかの造構に結び付くものか、西側に3号・4



第31図 小綱治古墳群石室状造構実測図 ($S = 1 : 40$)

号・5号トレンチを設定して調査を行った。3号・4号トレンチは、1号トレンチ同様南に傾斜して黒色土の厚い堆積が観察されたが黒褐色土の掘り込みは確認できなかった。4号トレンチの耕土中より須恵器の裏の破片が散在して検出された。

5号トレンチ中央部から須恵器の破片とともに集石が確認されたため西側一帯を拡張した結果、2列状の石室状造構が確認された。古墳の主体部の可能性もあるため、北側に7号トレンチを設定したが、遺物もなく周溝らしき造構も確認することはできなかった。



第32図 小鋸治古墳群石室状遺構遺物出土状況

(2) 石室状遺構 (第31~32図 図版14)

本遺構は、南西に開口を持ったU字状の配石遺構である。鳥居博士が遺物を探集した地点とも考えられ、古老によるところの付近が埴丘状に丸く盛り上がっていたとの話し、さらに出土遺物から古墳の主体部の残欠とも考えられ、石室状遺構とした。

表土下30cmほどの南にゆるやかに傾斜するローム漸移層上に据えられている。東側の配石方向はN-32°-Eで、南側に一部石を欠くものの3.5mにわたって石が見られる。北にて2重に石がみられるが意識的に石を組み合わせた状態ではない。30~40cmの平盤な川原石を用い、一部にこぶし大の小石が配されている。

西側の配石方向はN-45°-Eで、北端にて東側とつながっている。配石の長さは2.2mで東側より短い。耕作中に抜かれたものかは判然としない。40~50cmの河原石の外側に、こぶし大の小石が雜然とみられる。

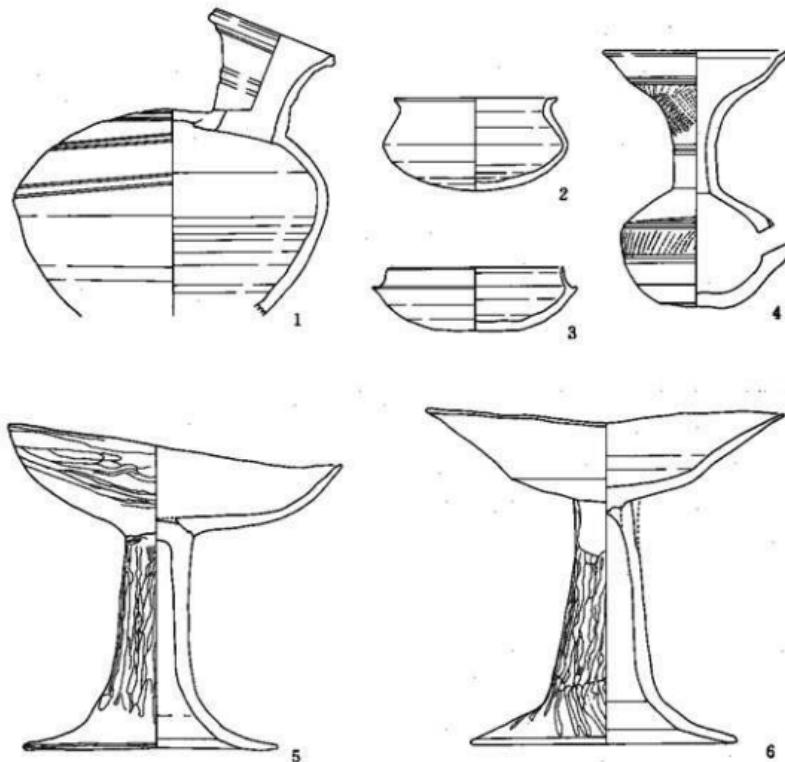
南側には石がみられず西同様頭初からのものは解らない。

配石内部は特に掘り込まれた痕跡はない。配石の横幅は南側にて外側1.5m、内側0.8m、北側は外側1.1m、内側0.5mである。東側配石中央外に焼土がわずか検出されている。

遺物の出土状態は第32図に示すとおり、総体的に北に集中してみられる。配石の内側が多く、配石の間からも出土している。

(3) 遺 物 (第33図 図版15)

第33図-1は須恵器の平瓶で、中央付近を中心広範囲から出土している。赤黒色を呈し堅く焼かれている。頸部からラッパ状に開く口縁は、二段構成の口縁端部をなし口唇は内傾する。胴



第33図 小綱治古墳群石室状遺構出土遺物 (15)

部は丸味を持っている。底部は欠損している。初めから打ち欠かれたものと思われる。二条を一对とした沈線文が頸部と頸下部に2箇所、胴央部に4箇所にみられる。

2は須恵器で短甕壺の一種であろうか。北側東配石と西配石の2箇所の接合で半分を欠く。丸底から大きく外傾する胴部は、胴央部から急に収束し短い口縁はく字に外反する。平端な口唇上端は受け口状となる。底部は黒色に胴から口縁部は灰黒色を呈し堅緻である。胴下部には回転ヘラ削りがみられる。

3は杯の身で須恵器である。北側東配石中よりの出土である。白灰色を呈し堅緻に焼かれ、体下部には濃緑色の自然釉がみられる。回転ヘラ削りによって体下部に稜を持たせている。口縁部の立ち上がりは受け部より低く内屈し、口唇部はわずかそぎ状を呈す。

4は須恵器の甕で口縁部は5分の1ほどしかない。北側東配石内側より出土している。灰黒色を呈し堅緻に焼かれ、胴上部と口唇部・内面口縁部に黒緑色の自然釉がみられる。

丸く立ち上がった胴部は突出する注口部にて稜を持たせ、細長い頸部からラッパに開く大きな口縁を持つ。口縁は央部にてややふくらみを持ち口唇部は外反する。

頸央部と注口部上端に2条の沈線文を、さらに注口部下端に一条の沈線文を配し区画帯を作出し、頸央部から口縁下間にかけてく字状の櫛描点列文を、注口部文様にも櫛描き点列文が施されている。甕内部には粘土塊らしきものがあり、「カラコロ」と良い音をたてている。注口部を抜いた時の粘土とも考えられる。

5は土師器の高坏で、脚の裾部の一部と坏の半分を欠いている。配石の北側と配石内部からの接合である。

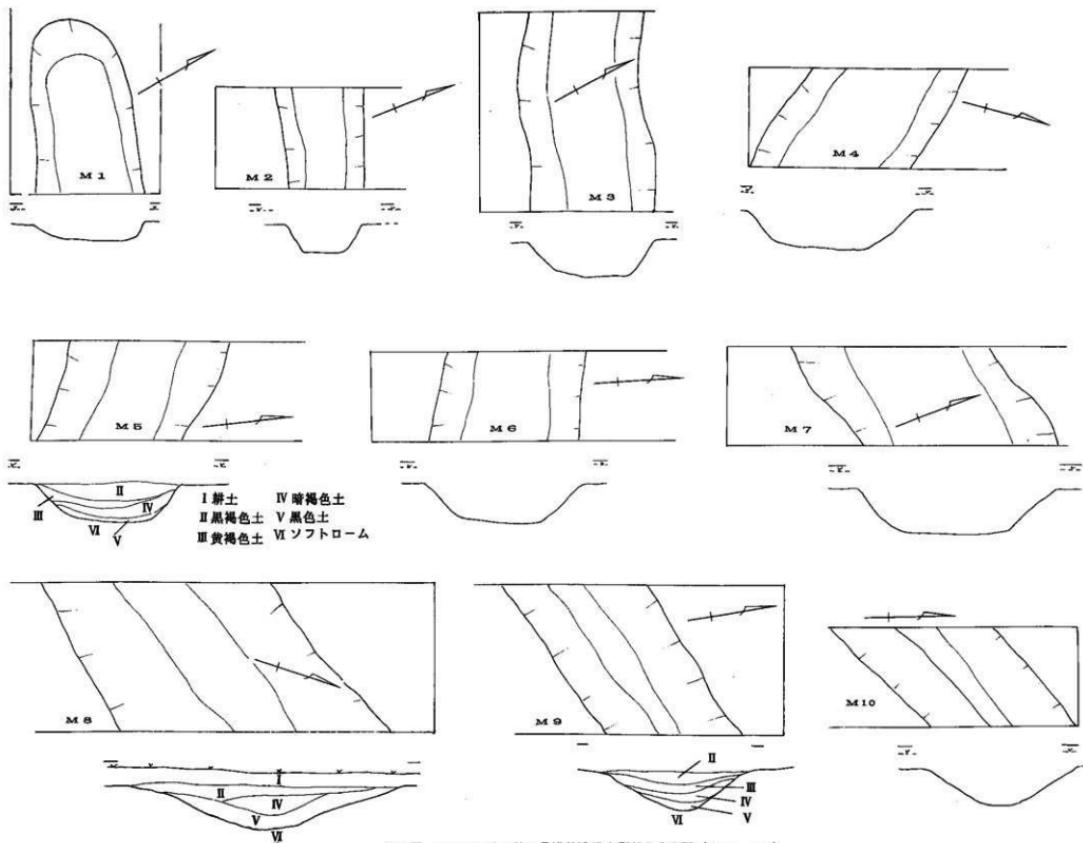
脚は細長く急に裾部を広げている。ほぞを持つ差し込み式で坏は腕に近い。杯はかなり傾いている。坏外面は丹念なヘラ磨きがみられ内面は黒色研磨される。脚部はタテのヘラ削りが行われ裾部はナデ調整が施されている。脚の内面は、裾部と共にヘラ削りによって稜を持たせている。

胎土にはわずかに長石を含み白黄褐色を呈している。焼成は普通である。

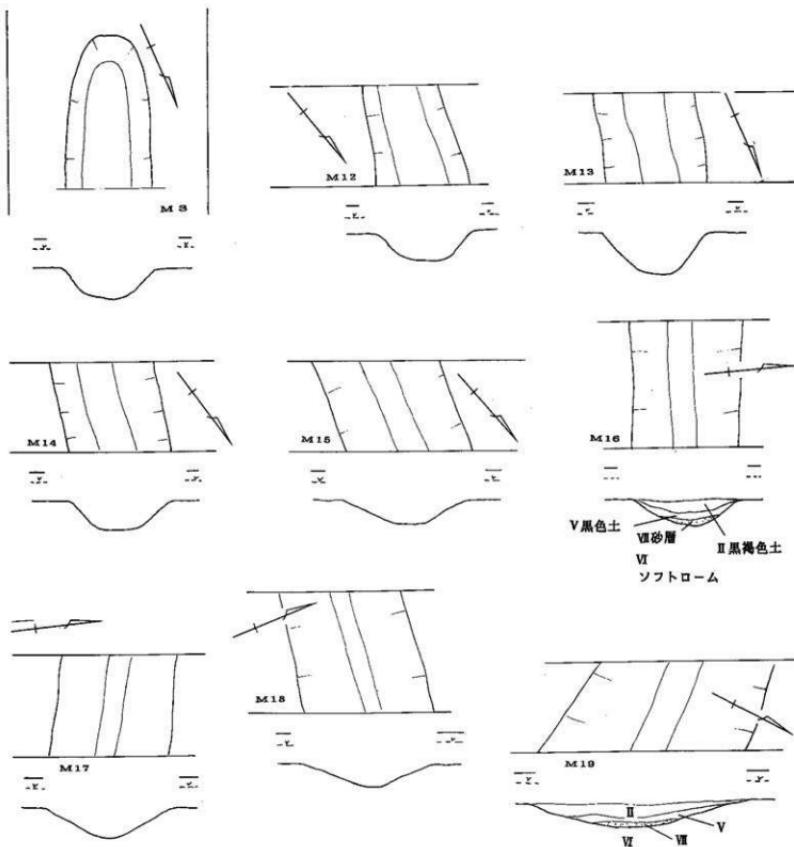
6も土師器の高坏である。北側東配石内部を中心出土している。脚の裾部と坏の3分の1ほどを欠いている。差し込み式で5同様脚部は細長い。杯部は丸味を持って立ち上がった後、体下部にて稜を持たせ内屈ぎみに外反させている。内面に段を作出している。

坏外面には非常に丹念にヘラ磨きが施され、内面は黒色研磨されている。脚部はタテのヘラ削りが裾部にまで及び、内面にはヘラ削りによって稜が作られている。胎土には少量の雲母と長石がみられ、赤褐色に堅く焼かれている。

さてこれらの遺物の時期であるが、出土状態からすれば同一時期に埋設されたものと考えるのが妥当であろう。5・6の高坏は坏部が扁平で脚部が細長いといった独特なものであり、あまり類例をみないものである。4の甕は7世紀前半に比定される。他の遺物もほぼ同時期のものであろう。

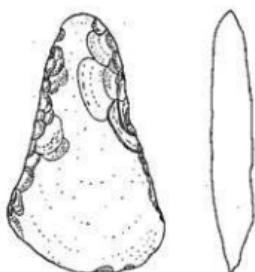


第34図 小綱治古墳群第1号溝状造構南側部分実測図 (S = 1 : 80)



第35図 小銚治古墳群第1号溝状造橋北側部分実測図 (S = 1 : 80)

7. 第1号溝状造構（第17・34～36図 図版）



第36図 小鍛冶古墳群第1号
溝状造構出土石器(16)

台地中央部2箇所から溝状造構が確認された。第1号溝状造構は第8号古墳の東側に広範囲にわたって検出されたもので、南側は一部上の原Ⅲ遺跡にかかっている。

平成4年度の調査及び今回の上の原Ⅲ遺跡の試掘（8号トレンチ）にて一部が確認されていたが、北や東に広く展開されることが予想されたため、小鍛冶古墳群の試掘調査として行うこととした。

桑畠の中にどのように溝状造構が走るか不明のため、バッカホウを用い予想される地点をトレンチ状に表土を19箇所剥ぎ、その後を精査することとした。

溝は第17図に示すように、東西に走るものとそれを直交するかのように南北に走るものとの2本が検出された。便宜上前者を南側部分、後者を北側部分と呼ぶこととした。各トレンチは、M1……M19で表示している。この調査において、M11トレンチより集石を伴う幅2mほどの黒色土の落ち込みが検出され古墳の周溝（8号古墳）と確認したため、市の単独事業として調査を行うこととした。なおM4トレンチは上の原Ⅲ遺跡8号トレンチと同一である。

南側部分は第8号古墳の南東10mを基点としてほぼ直線状に東西に75m伸び、そこから約45°北に向きをかえている。東端については調査できなかった向きをかえてから45mまで確認している。

溝の各断面は第34図に示すとおりであるが、西側は断面鉢状を呈し上幅は一定しないが1.5~3mと東向するに従い広くなり断面も舟底形を呈し深さも増していく。上幅の最大はM8トレンチで上幅4mを測る。M8トレンチから東は上幅2.5mとやや狭くなっている。

内部は、上部に黒褐色土、下部に黒色土が堆積し、一部ローム粒を含んだ暗褐色土が間層として認められた箇所もあった。（M8・M9・M10）若干の砂が検出されるも層をなしてはいない。

北側部分は、南の溝の西端25m（M3トレンチ）の地点から南北方向に73m直走した後東に向きをかえて35mM19トレンチまで確認した。

北側と南側とは近接するがつながってはいない。南側部分と同様鉢状を呈す断面は除々に舟底形を呈するようになる。M19トレンチまで確認した後、農道をはさんだ東側16・18トレンチでは確認できなかった。M19トレンチから急に向きを北にかえるか溝が終っている可能性も考えられる。

堆積状況は南側部分と同様黒褐色土の下部に黒色土がみられるが、底には明らかに砂の層がM16地点から東では検出されており、水の流れがあったものと考えられる。

遺物は少なく、M4トレンチ溝内部より第36図に示す硬砂岩製の打製石斧1点と、陶器片（すり鉢片1・天目茶碗の細片2）が出土したのみである。

この溝状造構の時期や性格は全く不明である。

8. 第2号溝状造構（第37・38図）

石室状造構の西側に検出されたものである。8号トレンチに黒色土の溝状落ち込みが確認されたため西側に9号トレンチ、さらにその北側に10号トレンチを設定した所、9号トレンチにて別方向に走る溝が検出された。10号トレンチの擾乱層中（第37図-17）より黒曜石製の縦長剝片（第38図-8）が出土したため、先土器時代の遺物の検出も考えられるため、表土を重機にてはぎ、調査することとした。10号トレンチの周辺をハードローム層まで 5×5 mの範囲掘り下げるも遺物は全く検出できなかった。

溝状造構は南北14m、東西10mの範囲に検出され2本からなる。

1本は8号トレンチに検出されたもので、調査区北側を東西方向に40m、その後ほぼ直角に南向きをかえ南洞に続く深い黒色土の落ち込みに至るものである。M4地点の南側は東に3m、南北7mほどの張り出し部を持っている。断面はなだらかな舟底状を呈している。深さは20cm前後と浅く南端ではやや深くなっている。上幅は一定しないが3~4mを測り、張り出し部では7mを測る。堆積土は黒褐色土一層で底にわずか砂がみられた。

もう一体は9号トレンチに確認されたもので、張り出し部の南にて交じわり切られている。東端はやはり南洞に続く黒色土の落ち込みに続くものと考えられる。断面は鉢状を呈している。堆積土は黒色土と底に5cmほどの砂層がみられた。

遺物は張り出し部の17地点から出土している。底の砂に混じって出土している。1から打製石斧と一緒に出土した陶器片（天目の壺）以外は硬砂岩製の石器や剝片である。

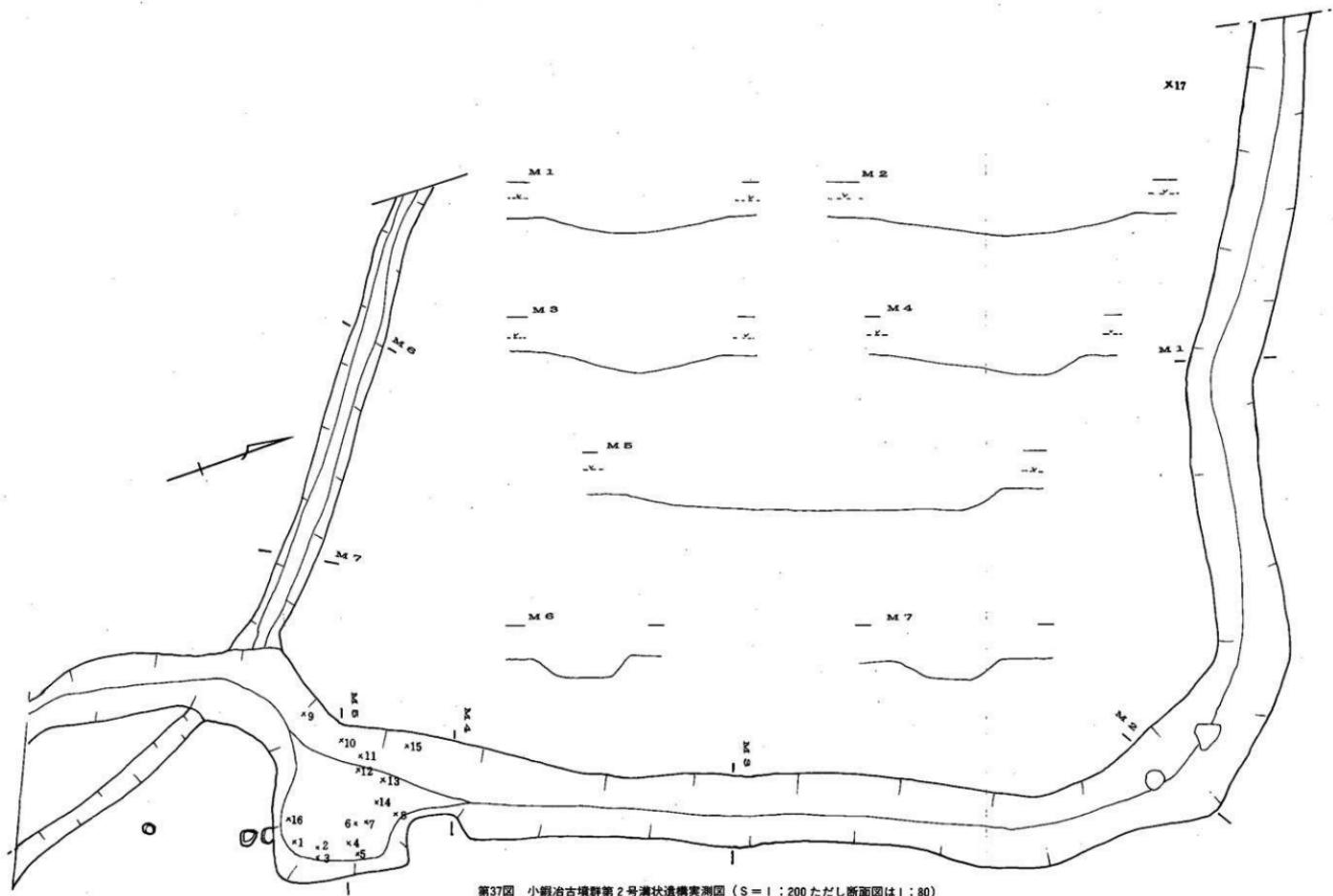
第38図-1~5は硬砂岩製の打製石斧で出土地点は小数字で表わしている。5以外は欠損品である。

6は硬砂岩製で大形粗製石匙の未成品と考えられる。7は棒状の硬砂岩の両端に敲打痕がみられるものである。

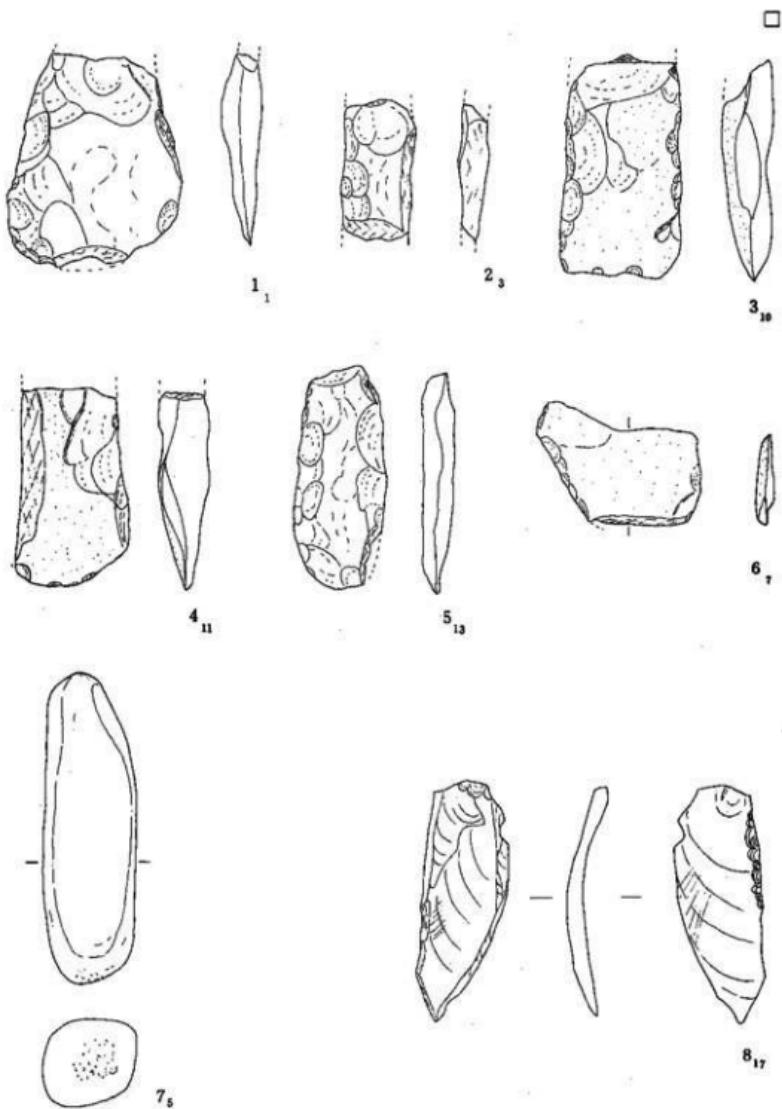
この張り出し部に集中して石器がみられ、しかも土器片が全くないことをどう理解したら良いかわからない。

また溝状造構の時期・性格も不明である。

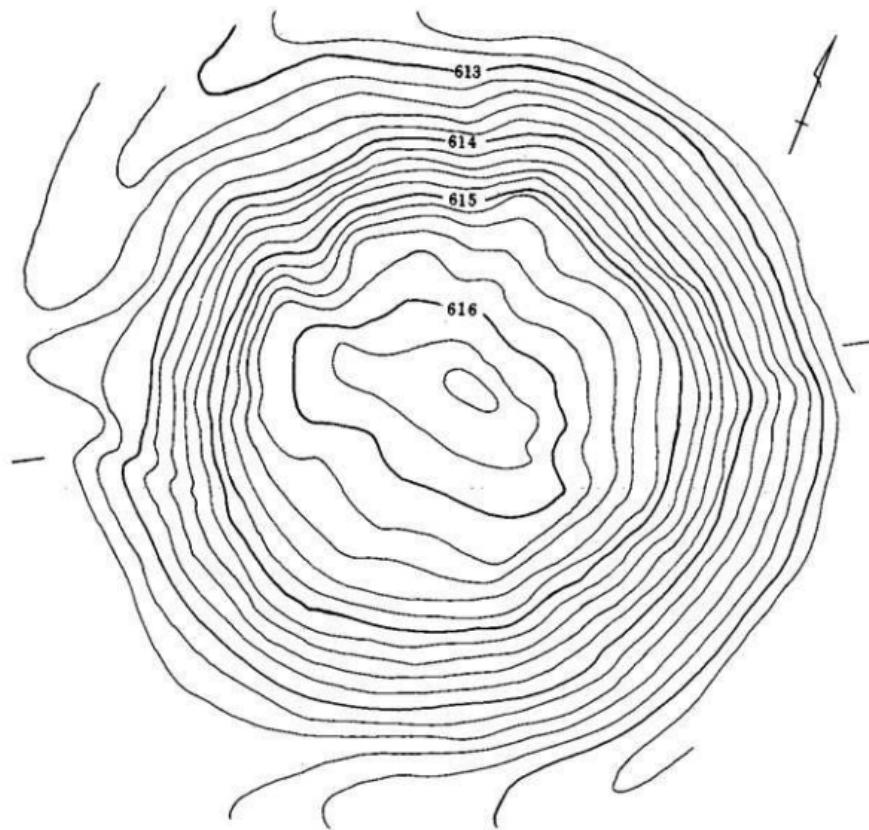
8は10号トレンチ擾乱土層より出土した黒曜石製の縦長剝片である。これのみでは時期を限定することはできない。



第37図 小綱治古墳群第2号溝状構築測図 ($S = 1 : 200$ ただし断面図は $1 : 80$)



第38図 小綱治古墳群第2号溝状遺構出土石器（1～7は1/2、8は1/2）



第39図 小鍛治古墳群第1号古墳実測図 ($S = 1 : 200$)

9. 第1号古墳（第39図、図版17）

当古墳は小假治古墳群の中では、最も北側にあり、段丘下には宮沢川が流れる。南西にはすでに消滅し、平成4年度の調査において周溝のみが検出された第3号古墳がある。その距離は25mである。

今まで確認されている古墳の中では、最も大きく径26mの円墳である。古墳は東にやや傾斜する段丘突端に築造され、墳丘の現高は西で2.8m、東で3.6mを測ることができる。墳頂部は西にややくずれしており、北西部に凹みがあり、多分他の古墳同様盗掘された可能性が高い。

墳丘の南東部と北西部に周溝らしき鞍部がみられる。

（氣賀澤）

第5節 ま と め

この広い古地を約6箇月かけて試掘調査を行った結果については、前述してきたとおりであるが、若干問題点等を指摘してまとめにかえたい。

上の原田遺跡、平成4年度の調査に続き、本年度はかつて御子柴型石器が出土した地点の周辺の試掘調査を行ったが、今年の調査でも該期の遺物は検出できなかった。これがまた御子柴型文化の有り様を示しているとも言える。故下村修氏の遺物採集想定地点は用地内に緑地帯として保存することとした。

雨堀遺跡は主体が東側の段丘下にあり、今回の調査は西の限界を知るためのものであった。調査結果は打製石斧が一点出土したのみで遺構の検出はみられなかった。

小銀冶古墳群の調査の中心は、大正年間に確認されていた9基と遺物採集地点1箇所の不明箇所の確認であった。

調査の結果は市の単独調査と併せ消滅した古墳2基の周溝を確認でき、さらに遺物採集地点から石室状遺構を確認することができた。その結果不明の古墳は大正年間に消滅していたとされる9号古墳のみである。9号古墳は位置からすると第7号古墳の南側水田にあったと思われる。

以上のことからすると、古墳は2基が一組みとなって存在していたことがわかる。台地縁辺部北側に1号墳と3号墳、縁辺部中央部に2号墳と4号古墳、その南側に6号墳と石室状遺構、台地内側に7号墳と8号墳、さらに南側に市道で壌された10号墳と不明の9号墳である。

すでに主体部を欠いた周溝のみのものや盗掘されたものなどで今回の調査では、時期を明確にできたものは石室状遺構のみである。各古墳間の時間的相違などは不明である。2基を一組とした5群の古墳の有り方と併せ今後の課題である。

(気賀澤)



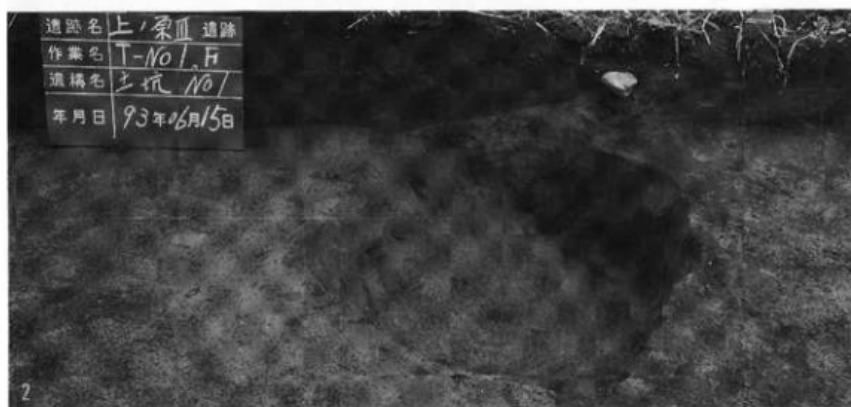
上ノ原III遺跡

1.全景(西より)
2.〃(東より)



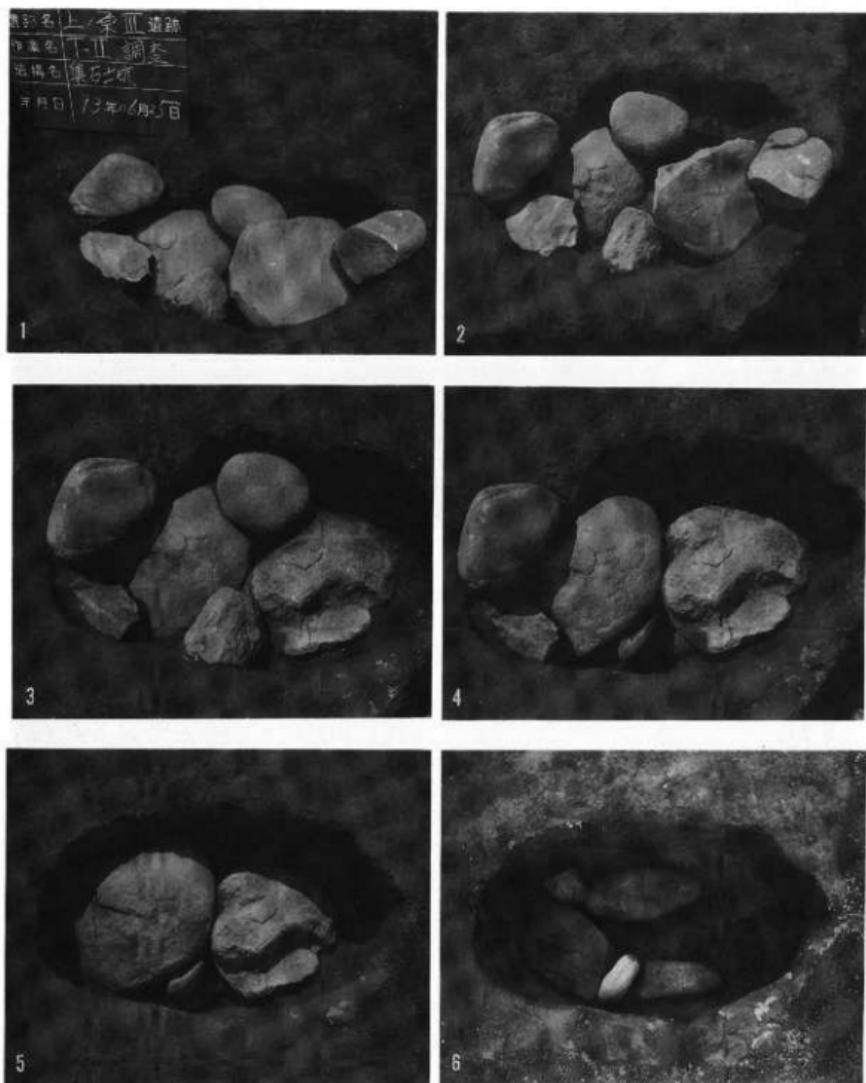
上ノ原III遺跡

1.2. トレンチ調査状況、溝



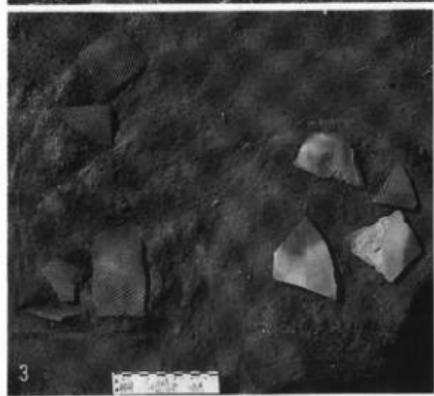
上ノ原Ⅲ遺跡

1. レンチⅢ、断面2
2. レンチ I、F 区土坑
3. レンチ II、E 区出土状況



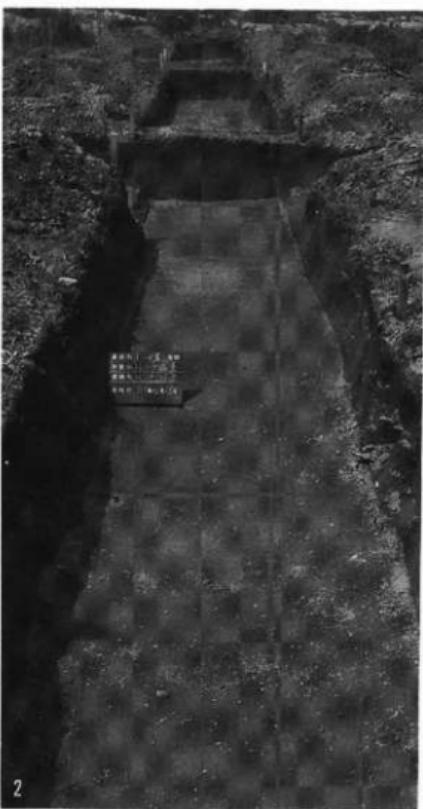
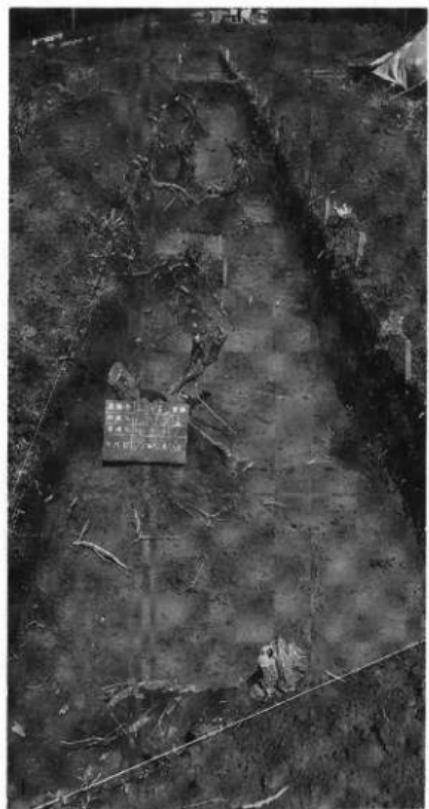
上ノ原III遺跡

1~6. 2号土壤(上部より下部)



上ノ原III遺跡
1.2.トレンチ調査状況

小鐵冶古墳群
3.雨洞北地区 須恵器片出土状況
4.雨洞地区 グリッド調査状況



上ノ原Ⅲ遺跡
1.2.トレンチ調査状況



1.上ノ原田遺跡、溝状遺構
2.雨洞、グリット調査状況



小鎌治古墳群

1. 雨洞地区 全景(北より)
2. // // (南より)



小金治古墳群

1~4. トレンチ、グリッド調査状況



小銀冶古墳群

1.第2号古墳 周溝調査 2.雨洞北 石器出土状況 3.4.トレンチ調査、道路上造構



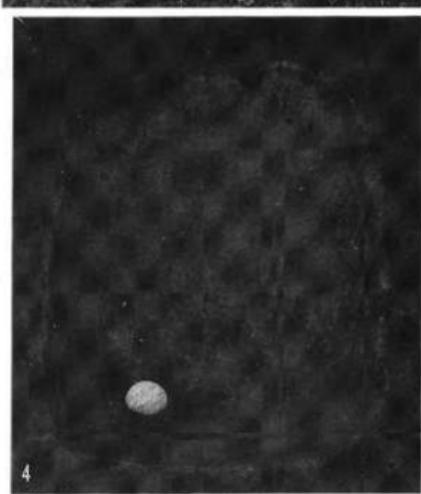
2



3



小鍛冶第7号古墳
1.墳丘全景(西より)
2.3.鉄剣残欠(表・裏)

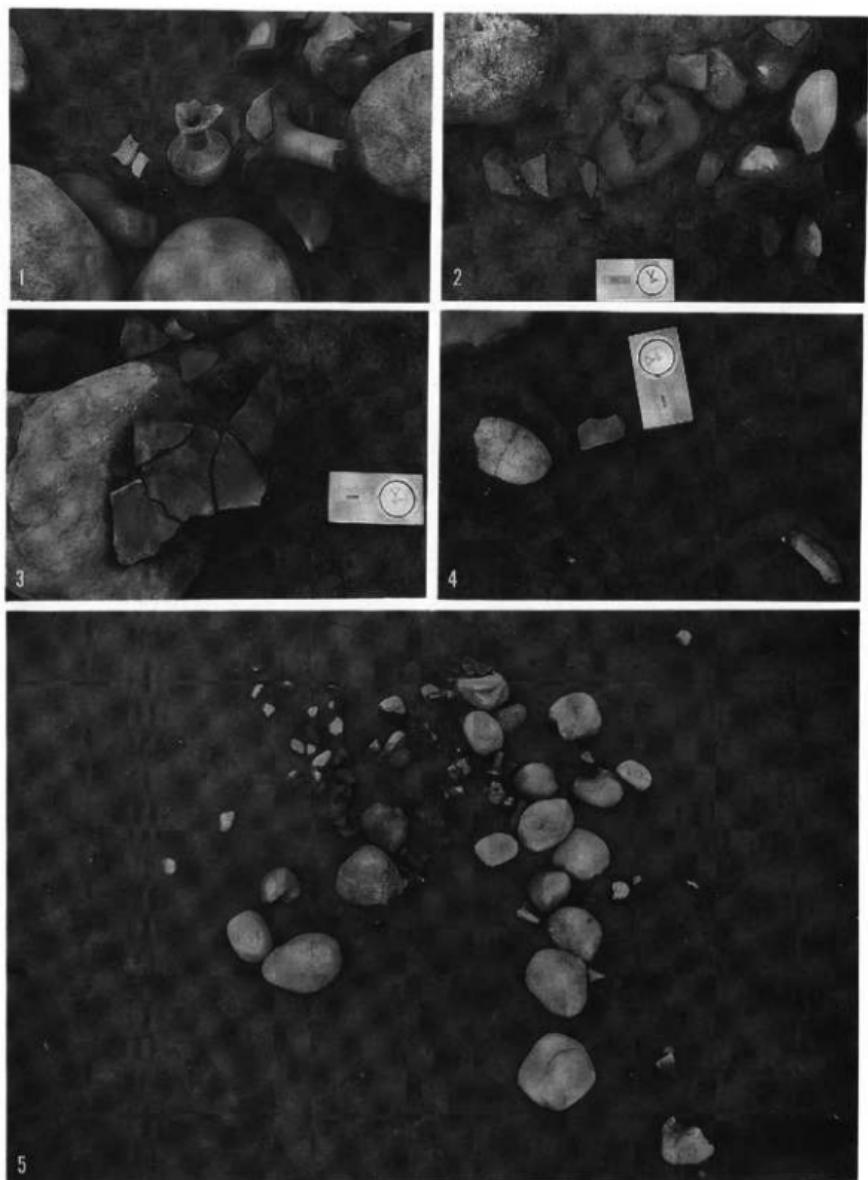


小銀冶第7号古墳
1.第1号トレンチ 2.第5号トレンチ
3.鉄剣出土状況
4.周溝外土坑



小銅治第7号古墳
1.3.第2トレンチ
2.第3トレンチ

図版14



石室状遺構

1~4.出土状況

5.遺構



1



2



3



4



5

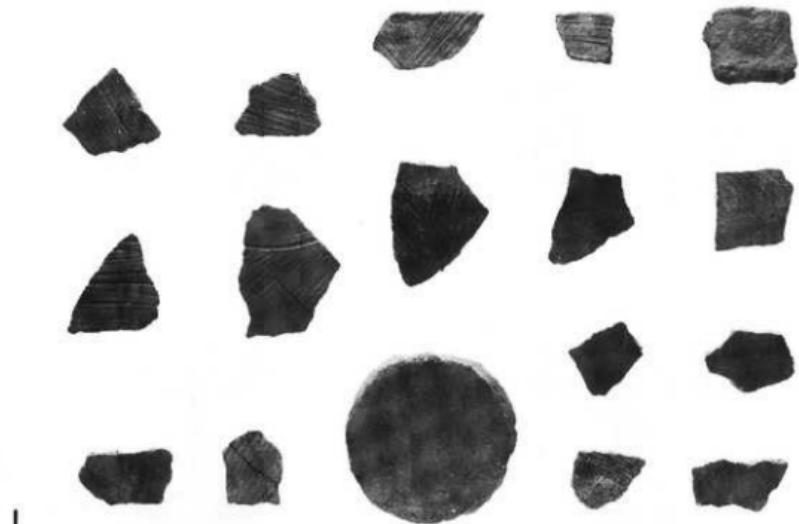


6

石室状遺構出土

1.2.4.6.須恵器

3.5.土師器(1.2.=1:2) (3~6=1:3)



1



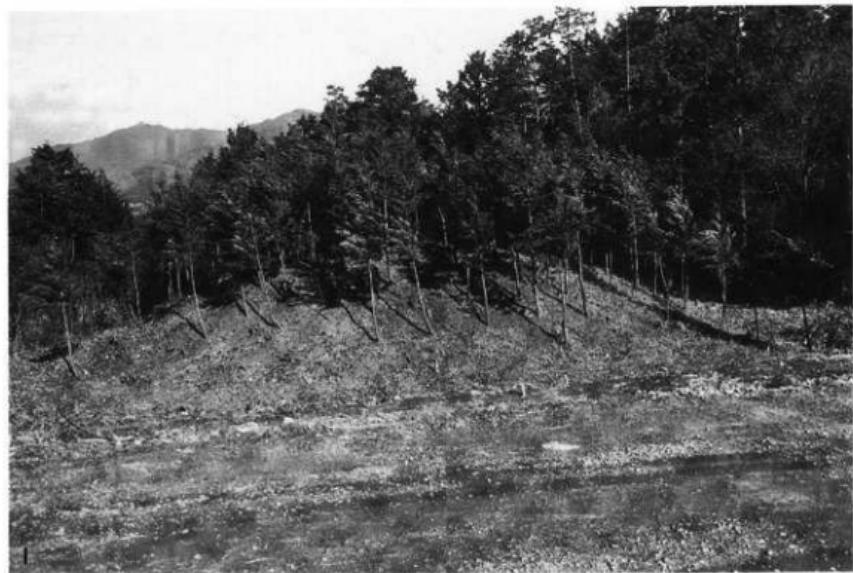
2

上ノ原III遺跡 出土土器
1.2.(2.=1:1)



3

小金治古墳群
3.雨潤北地区 出土石器(1:1)



小銀治古墳群

- 1.第1号古墳
- 2.第2号古墳

上の原Ⅲ遺跡・雨堀遺跡・小銀治古墳群

— 試 摂 調 査 —

平成6年3月20日 発行

編 集 上の原Ⅲ遺跡・雨堀遺跡・小銀治古墳群発掘調査団

発 行 駒ヶ根市赤須町20番1号

駒ヶ根市教育委員会

印 刷 駒ヶ根市赤穂4295

(有) 宮 沢 印 刷